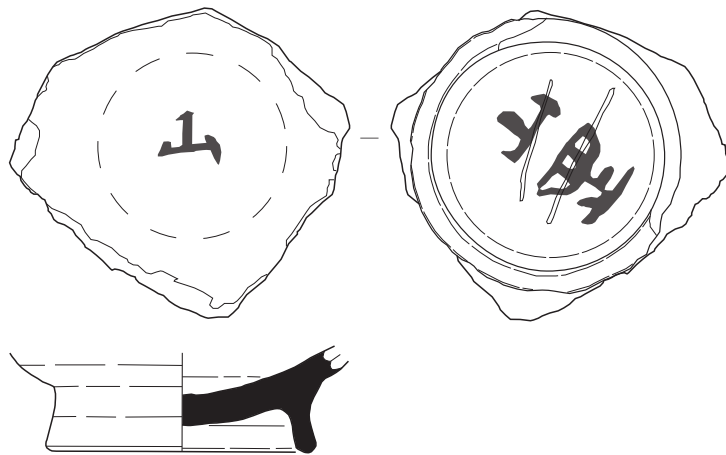


# 元石川大谷原遺跡

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



2008

水戸市教育委員会  
水戸市大谷原遺跡発掘調査会

SI01 出土墨書土器

内面見込「山」

底裏「山岡」

# 元石川大谷原遺跡

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2008

水戸市教育委員会  
水戸市大谷原遺跡発掘調査会

## ごあいさつ

「元石川大谷原遺跡」は、石川川右岸の台地上に位置しております。この「大谷原遺跡」の周辺には、縄文時代前期に営まれた国指定史跡「大串貝塚」や古墳時代前期から後期に営まれた「森戸古墳群」、古代常陸国那賀郡の郡衙正倉別院である「大串遺跡」など多くの重要遺跡が残されており、古くから政治・文化の中心地域であったと考えられます。

歴史的文化遺産のひとつである埋蔵文化財は、工事や開発などにより一度破壊されると二度と原状に復すことができないため、私たちが大切に保存しながら後世へ伝えていかなければならない貴重な財産です。

近年の大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたびの調査は、当該遺跡内に宅地造成工事が計画され、遺跡への影響が予想されたため、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に至り、次善の策として発掘調査を実施し、記録の上での保護措置を講ずることとしたものです。

本調査により、古墳時代・平安時代の竪穴建物跡や中・近世の掘立柱建物跡などが確認されるとともに、各種の遺物が出土し、本市の古代史研究はもとより、今後において埋蔵文化財を保護保存するうえでも貴重な資料を得ることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました郡司不動産株式会社の皆様、並びに種々の御指導、御助言をいただきました茨城県教育庁文化課の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成 20 年 12 月

水戸市教育委員会  
教育長 鯨岡 武

# 例 言

1. 本書は、水戸市元石川町に所在する元石川大谷原遺跡（第1地点）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宅地造成に伴い、郡司不動産株式会社の委託を受け、水戸市教育委員会の指導の下、水戸市大谷原遺跡発掘調査会が行った。
3. 調査概要及び調査組織は下記の通りである。

所在地 水戸市元石川町字大谷原 2265 番地外

調査面積 確認調査 920.0 m<sup>2</sup>

本発掘調査 365.8 m<sup>2</sup>

確認調査 平成 19 年 10 月 24 日～平成 19 年 11 月 5 日

本発掘調査 平成 20 年 1 月 21 日～平成 20 年 2 月 14 日

調査担当者 川口 武彦（日本考古学協会会員、水戸市教育委員会文化振興課文化財主事）

調査参加者 確認調査 石崎洋子、久保田 馨、高安幸且、高柳悦子、富田 仁、三井 猛

本発掘調査 石川 勉、榎澤由紀江、小山司農夫、河原井俊吉郎、久保木きよ子、久保田 馨、

栗原芳子、佐々木淑美、富田 仁、中山忠雄、永井久雄、三井 猛、皆川幸子、村上巧兒

## 調査組織

会 長 鯨岡 武 水戸市教育委員会教育長

副会長 後藤 道雄 茨城県文化財保護審議会委員・水戸市文化財保護審議会会長

理 事 郡司 一見 郡司不動産株式会社代表取締役

郡司 竜一 郡司不動産株式会社専務取締役

川崎 純徳 茨城県埋蔵文化財指導員・水戸市文化財保護審議会委員

田尻 充 水戸市市長公室長

小澤 邦夫 水戸市教育委員会教育次長

監 事 宮田 正彦 水戸市文化財保護審議会副会長

大島 正芳 水戸市教育委員会教育企画課長

幹 事 仲田 立 水戸市教育委員会文化振興課長

事務局（平成 20 年 3 月まで）

中里誠志郎 水戸市教育委員会文化振興課長補佐

宮崎 賢司 水戸市教育委員会文化振興課文化財係長

関口 慶久 水戸市教育委員会文化振興課文化財係文化財主事

緑川 義規 水戸市教育委員会文化振興課文化財係主事

新垣 清貴 水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

渥美 賢吾 水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

木本 拳周 水戸市教育委員会文化振興課文化財係埋蔵文化財専門員

事務局（平成 20 年 4 月から）

中里誠志郎 水戸市教育委員会文化振興課長補佐

宮崎 賢司 水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係長

荻谷 慎一 水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係主査

関口 慶久 水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係文化財主事






渥美 賢吾 水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係文化財主事

金子 千秋 水戸市教育委員会文化振興課文化財係兼世界遺産推進係埋蔵文化財専門員

4. 本書は、川口・渥美・色川順子（大申貝塚ふれあい公園）が分担して執筆し、文責はそれぞれ文末に記載した。編集は川口が行った。なお、SI01 出土鉄製鉸具については、日立市郷土博物館の片平雅俊氏に所見の執筆を依頼した。

5. 遺構・遺物の写真撮影は、川口が行った。
6. 遺構の計測業務は有限会社三井考測に委託した。
7. 墨書土器の特殊光撮影は、有限会社三井考測の三井 猛氏に依頼した。
8. 記録及び出土遺物は水戸市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表する次第です（敬称略・順不同）。  
 【個人】 青山俊明，飯島一生，稲田健一，川崎純徳，金田明大，桐生直彦，小杉山大輔，後藤一成，斎藤弘道，曾根俊雄，田中 裕，松井敏也，三井 猛，横倉要次  
 【機関】 文化庁文化財部記念物課，独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室，茨城県教育庁文化課，有限会社三井考測
10. 整理作業には以下の者が参加した。  
 安島町子，杉崎明美，鈴木加代子，須藤裕美，田上雪枝，橋本祥子，人見よね子，広瀬文子，深澤貞子

## 凡 例

1. 本書に記してある座標値は世界測地系を使用している。
2. 本文中に掲載した実測図の縮尺は，原則として次の通りである。  
 トレンチ配置図 1/600 遺構配置図 1/130 遺構図 1/40・1/60・1/80 柱穴セクション図 1/40  
 土器実測図 1/4 土製品・土器拓影図 1/3 剥片石器実測図 4/5 石製品実測図 1/3 金属製品実測図 1/2
3. 本書中の色調表現は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修 2000 年版）に従った。
4. 遺物観察表の計測値については，次の通りである。  
 ( ) : 残存値 [ ] : 回転復元値 法量の計測値の単位は，cm・g である。
5. 遺構の略記号については，下記の通りである。  
 掘立柱建物跡 :SB 竪穴建物跡 :SI 溝跡 :SD 土坑 :SK 攪乱 :K
6. 遺構の実測図上の表現については，下記の通りである。  
 カマド :  焼土 : 
7. 遺物の実測図上の表現については，下記の通りである。  
 須恵器 : 断面黒塗り  
 土師器 : 断面白抜き  
 土師器内面黒色処理 :  土師器漆塗 :  鉄製品木質部残存範囲 : 

# 目次

あいさつ 例言 凡例 目次

## 第1章 調査に至る経緯と調査経過

- 1-1 調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・・・・1
- 1-2 本発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・・・・4
- 1-3 整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・・・・6

## 第2章 遺跡の周辺環境

- 2-1 地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・・・・7

## 第3章 検出された遺構と遺物

- 3-1 先土器時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・・・・10
- 3-2 縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・色川・・・・10
- 3-3 古墳時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・渥美・・・・14
- 3-4 平安時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・渥美・・・・19
- 3-5 近世・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・・・・28

## 第4章 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・川口・・・・29

付論 第1号竪穴建物跡出土鉄製鉸具について・・・・・・・・・・・・・・・・片平・・・・32

写真図版

報告書抄録

## 挿図目次

第1図	調査地点の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2図	元石川大谷原遺跡・小仲根遺跡・森戸古墳群の範囲と確認調査のトレンチ配置・・・・2
第3図	元石川大谷原遺跡と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・7
第4図	本発掘調査で確認された遺構・・・・・・・・・・・・9
第5図	先土器時代の剥片・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第6図	遺構外出土の縄文土器・・・・・・・・・・・・・・11
第7図	遺構外出土の縄文土器・土製品・・・・・・・・・・・・12
第8図	第2号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・14
第9図	第2号竪穴建物跡柱穴セクション・・・・・・・・・・・・15
第10図	第2号竪穴建物跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・・16
第11図	第3号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・17
第12図	第3号竪穴建物跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・・18
第13図	第1号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第14図	第1号竪穴建物跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・・21
第15図	第4号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・23
第16図	第4号竪穴建物跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・・24
第17図	第5号竪穴建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・25
第18図	第5号竪穴建物跡出土遺物・・・・・・・・・・・・・・26
第19図	第1号掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第20図	第1号掘立柱建物跡柱芯々間距離模式図・・・・・・・・28
第21図	寛永通宝・・・・・・・・・・・・・・・・・28
第22図	石川川流域における古墳群の変遷・・・・・・・・・・・・30

## 表目次

第1表	確認調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第2表	元石川大谷原遺跡と周辺遺跡一覧・・・・・・・・・・・・8
第3表	土器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12～13
第4表	土製品観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第5表	第2号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧・・・・・・・・・・・・14
第6表	第2号竪穴建物跡出土遺物属性表・・・・・・・・・・・・16
第7表	第3号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧・・・・・・・・・・・・17
第8表	第3号竪穴建物跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・17, 19
第9表	第1号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧・・・・・・・・・・・・20
第10表	第1号竪穴建物跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・22
第11表	第4号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧・・・・・・・・・・・・23
第12表	第4号竪穴建物跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・24
第13表	第5号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧・・・・・・・・・・・・25
第14表	第5号竪穴建物跡出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・27
第15表	第1号掘立柱建物跡柱穴一覧・・・・・・・・・・・・28

# 第1章 調査に至る経緯と調査経過

## 1-1 調査に至る経緯

文化財保護法第93条に基づき、平成19年5月25日付にて郡司不動産株式会社 代表取締役 郡司一見（以下、事業者という）から茨城県教育委員会教育長（以下、「県教育委員会教育長」という。）あて、常磐の杜水戸南ニュータウン造成工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」が水戸市教育委員会（以下、「市教委」という。）へと提出された。

開発予定地である水戸市元石川町字大谷原 2265 番地外は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「小仲根遺跡」と「森戸古墳群」の範囲に一部該当していたが、大半は周知の埋蔵文化財包蔵地外であった。今般の土木工事は、開発面積が 387,583.70 m<sup>2</sup> と大規模であるうえに、計画地の大半が周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接しているため、遺構・遺物の存在が予測された。

しかしながら、当時水戸市では大串遺跡第7地点や七面製陶所跡の確認調査等を実施しており、調査体制の確保が困難であったため、確認調査の実施および期間等について事業者と調整を図っていた。

その後、平成19年10月15日に市教委の埋蔵文化財専門職員が現地踏査を実施したところ、平安時代の土器が出土する竪穴建物跡の一部を切土工事による断面で確認した。遺構が発見された事業者から文化財保護法第96条に基づき、遺跡発見届が平成19年11月22日付で茨城県教育委員会教育長あて提出された。

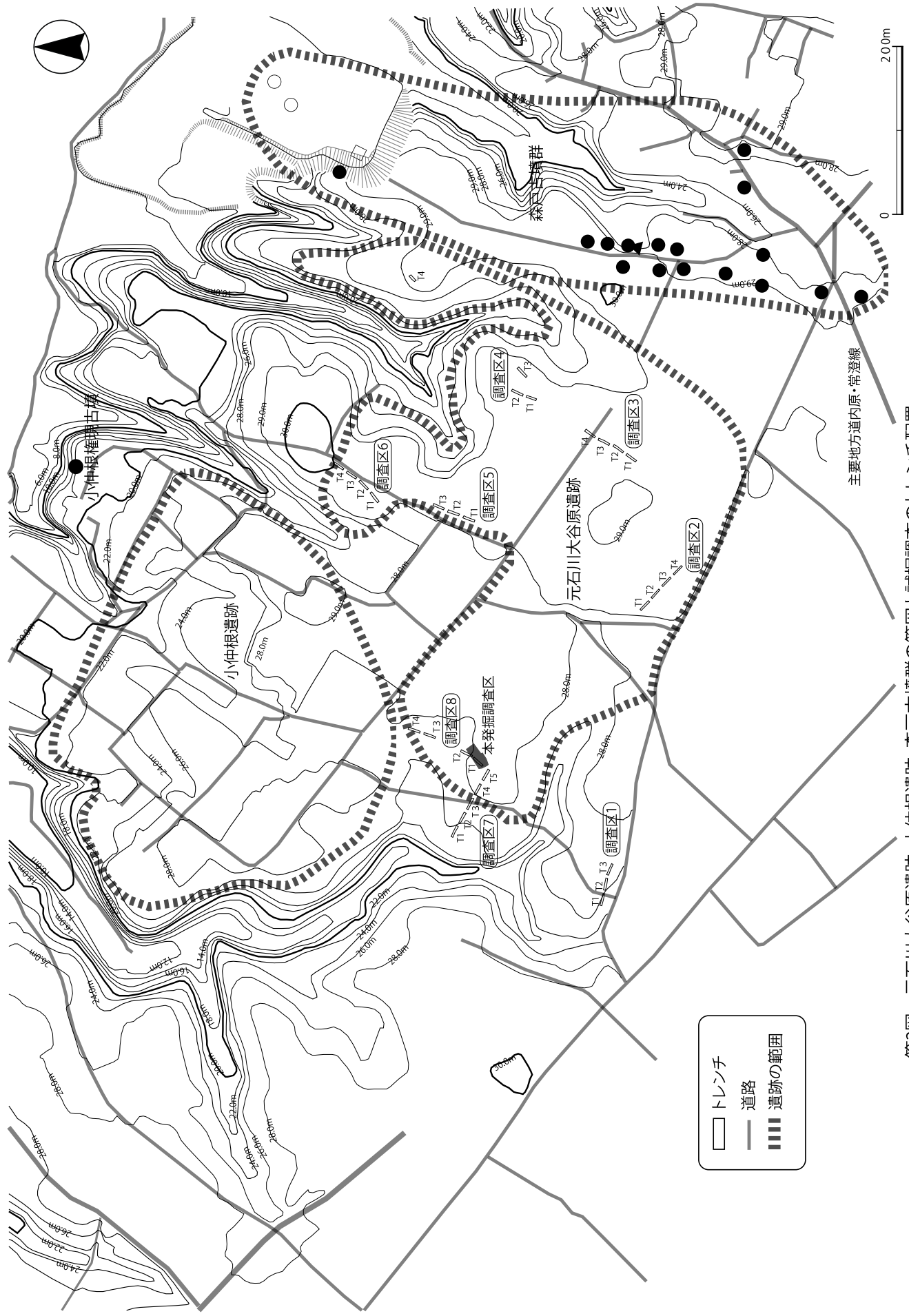
これを受けて、茨城県教育委員会から、事前に発掘調査を実施する必要があること、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合には、その保存等について別途協議を要する旨、勧告があった。

事業者に遺跡の範囲確認のための確認調査の実施およびその後の本発掘調査の実施について協力を求めたとこ



第1図 調査地点の位置 (S=1:25,000)





第2図 元石川大谷原遺跡・小中根遺跡・森古墳群の範囲と試掘調査のトレンチ配置

る、重機を提供するとともに、確認調査および発掘調査の実施に協力する旨の回答が得られた。

確認調査は平成19年10月24日～11月5日の期間に8日間実施した。調査は、計画地内の8箇所にてトレンチを設定し、遺構・遺物の有無を確認する方式を採用した。トレンチは長さ10～15m、幅2mのものを合計31箇所を設定し、総計920㎡を調査した(第2図)。確認調査の成果は、第1表の通りである。

この調査成果に基づき、事業者と協議・調整を行い、水戸市教育委員会は川口武彦を調査担当者とする水戸市大谷原遺跡発掘調査会(会長 鯨岡 武)を平成19年12月14日付で組織し、文化財保護法第92条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を茨城県教育委員会へと提出し、平成20年1月21日から水戸市大谷原遺跡発掘調査会が本発掘調査を実施することとなった。(川口)

第1表 確認調査の成果

調査区	トレンチ 番号	遺構	遺物	遺構の 種別	遺構の 時期	検出深度 (m)	調査区	トレンチ 番号	遺構	遺物	遺構の 種別	遺構の 時期	検出深度 (m)
1	1	×	×	—	—	—	5	1	×	×	—	—	—
	2	×	×	—	—	—		2	×	×	—	—	—
	3	×	×	—	—	—		3	×	×	—	—	—
2	1	×	×	—	—	—	6	1	○	○	掘立柱建物 跡1	中世以降	0.9
	2	○	×	溝1	不明	0.4		2	×	×	—	—	—
	3	×	×	—	—	—		3	×	○	—	—	—
	4	×	×	—	—	—		4	×	×	—	—	—
3	1	○	×	溝1	不明	0.7	7	1	×	×	—	—	—
	2	○	×	溝1	不明	0.5		2	×	×	—	—	—
	3	×	×	—	—	—		3	×	×	—	—	—
	4	○	○	道路状遺 構1	—	0.4		4	×	×	—	—	—
4	1	×	○	—	—	—	8	5	×	×	—	—	—
	2	×	×	—	—	—		1	○	○	竪穴建物跡 1	古墳以降	0.5
	3	×	×	—	—	—		2	○	×	竪穴建物跡 1	古墳以降	0.4
	4	○	○	竪穴建物 跡1	平安	0.4		3	×	○	—	—	—

## 1-2 本発掘調査の経過

本発掘調査は、平成20年1月21日～2月14日の期間に実施したが、事業者から協力の得られた調査期間および調査経費上の制約から、確認調査で検出されていた竪穴建物跡3軒(SI01～SI03)を本発掘調査の対象とした。以下、調査日誌の概略を記す。

1月21日(月)曇りのち晴れ SI01の土層観察用ベルト部分の調査。表土～2層までを午前中に掘り下げ、午後からは覆土の3層下部まで掘り下げた。3層については、20cm毎に上層・中層・下層に分けて遺物を取り上げ。下層については、床面直上に近づくことから3cm以下の遺物についてはタワー状に残す。

1月22日(火)晴れ SI01の遺物出土状況の写真撮影を行った後、平面図(S=1/20)に遺物のドットを落としたものを作成し、遺物のドット上げを行った。その後、タワーを崩して、平面図を作成し、柱穴の掘削、柱穴のセクション図作成を行った。

1月24日(木)晴れ SI02～03付近の表土除去を開始。SI02とSI03は一辺が6～7mクラスの大型の竪穴建物跡であることが判明。また、SI02の南東部で切り合うSI04を新たに確認。一辺が3m程度の小規模な竪穴建物跡であることから、平安時代以降のものか。(有)三井考測にSI01の平面図作成およびSI02～SI04付近への基準点設置を依頼。SI01の平面図は完了。基準点については、2箇所設置してもらい、T1が28.252m、T2が27.861mであった。午後からは平安時代のSI04の掘り下げを開始。内面黒色処理土師器坏や碗などが出土。

1月25日(金)晴れ SI04の土層の堆積状況の断面図作成、写真撮影、ベルト除去を実施。遺物は極めて少ない。また、SI02のベルト北側の覆土除去も開始。SI02からは、6世紀後半頃とみられる鬼高式の土師器甕口縁部片が出土。

1月28日(月)晴れ SI04の平面図作成およびSI02ベルト北側部分の掘削を実施。SI04はカマド部分および柱穴を残して、平面図がほぼ完了。柱穴については貼り床上面で柱穴と思われるピットは確認できなかったが、四隅に柔らかい円形状の土層が堆積しており、柱穴部分に該当する可能性がある。SI02は床面まで掘削が終了したが、遺物は殆ど出土していない。覆土の様相を見る限り、人為的な埋め戻しによる埋没過程が推測される。

1月29日(火)雨 SI04のカマド断ち割りおよび柱穴探索、SI02のベルト南側部分掘削を実施。SI02の

ベルト南側部分については、床面直上まで掘削がほぼ完了。SI04のカマド断ち割りについては、予想以上に残存状況が良く、柱穴については、想定通り、四隅にみられた柔らかい円形状の土層が柱穴であることを確認。深さ5～10cm程度で浅いことが判明。

1月30日(水)くもり SI02の掘削およびSI04のカマド掘削を実施。SI02については、ベルト部分およびSI04との重複部分を残して、床面まで到達。柱穴については、ベルトの南側で2箇所、北側で4箇所見つかっており、柱穴の据え変えなどが行われた可能性がある。SI02のカマド部分については、砂利混じりの粘土から構築されていることが精査により確認できた。SI04のカマド部分については、遺物が出土したため、縦断面の掘削が未了。

1月31日(水)晴れ SI02の東西ベルトセクションの写真撮影およびセクション図作成、ベルト除去、SI04のカマド調査、SI05の確認を実施。SI04のカマドについては、焚き口部分までのセクション図作成が完了。SI05はSI04の東側で新たに確認された遺構である。遺構確認面からは、内面黒色処理土師器坏や碗などの破片が出土していることから、平安時代の竪穴建物跡の可能性が考えられる。

2月4日(月)晴れ SI04のカマド部分の東西セクションおよび柱穴1～4、出入り口ピットのセクション図作成、カマド部分の東西・南北セクションの写真撮影、SI02のカマド部分の写真撮影、周溝の掘削、柱穴の半裁、SI05の北側部分の掘削等を実施。SI04の柱穴については北西側から時計回りの方向に1～4の番号を振った。SI02についてはカマド内から土師器片が数点出土したにとどまる。SI02の柱穴については、7箇所あることが確認され、四隅の主柱穴が深く、主柱穴間の柱穴については浅い傾向がみられた。SI05は北側にカマドがある可能性が高いことが判明。遺物は覆土最上部の黒色土層に多く含まれており、その下層にある褐色土層になると遺物は多少、少なくなる傾向が見られた。

2月5日(火)晴れ SI02の柱穴0～8および出入りピットの掘削・断面写真撮影、カマド東西セクション図作成、カマド部分断ち割り、SI04のカマド掘削、SI02・

SI04 ベルト部分取り外し,SI05 の覆土掘削を実施。SI02 のカマドは,袖部分に 5mm ~ 1cm 大の円礫を混ぜた砂層から構築されており,その外側には同様の円礫を含む砂礫層による補強がされていた。遺物は土師器甕片とみられる土器片が数点出土したが,柱穴 7 から出土したガラス質黒色安山岩製の剥片は,本遺跡の形成時期を探る上で注目される資料である。床面がほぼ武蔵野台地 VI 層相当層くらいまで掘削しており,それより下層で出土していることから,第二黒色帯中の所産の可能性が高い。SI04 については,カマド部分の掘削が完了。写真撮影後,SI02・SI04 ベルト部分の取り外しを実施。遺物はカマドの袖中より土師器片が数点出土したにとどまる。SI05 については,南北ベルトがカマド部分からずれて設定してしまっていたこと,東西ベルトとほぼ同じ土層堆積状況であったことから,東西ベルトのみを残して掘り下げを実施。遺物は覆土の上層~中層にかけて土師器甕片や内面黒色処理土師器坏片,須恵器甕片などが出土している。

2月6日(水) 雪のち雨 SI02 の柱穴 0 ~ 8・出入口ピットセクション図作成,カマド南北セクションの写真撮影・作図,SI05 の東西ベルト南側の掘り下げ,東西ベルトセクション写真撮影を実施。

2月8日(金) 晴れ SI02 のカマド袖部分の断ち割りおよび東西セクションの写真撮影,カマド部分の完掘状況写真の撮影,SI02 完掘状況の写真撮影,SI05 の東西セクション図作成,SI05 カマド部分の東西セクション図作成,東西セクション写真撮影,SI05 の柱穴半裁,SI03 の北西部掘削を実施。SI02 については掘削が完了し,(有)三井考測に平面図およびエレベーション図作成を依頼。SI05 については東西セクション図作成,SI05 カマド部分の東西セクション図作成,東西セクション写真撮影が完了。柱穴については,SI04 と同様,コーナー部分に近い位置から 4 つ検出されており,カマド部分の反対側には出入口ピットとみられる柱穴が確認された。北西から時計回りの方向に柱穴 1 ~ 柱穴 4 と番号を振って半裁を実施した。その結果,柱穴 1 と柱穴 4 は浅いものに対し,柱穴 2 は掘り方も大きく深い状況が確認された。柱穴 3 と出入口ピットについては,半裁作業が未了。SI03 は掘削の結果,床面直上から焼土とともに多数の炭化材が倒壊した状況で検出された。その事から,焼失家屋の可能性が考えられる。遺物については土師器甕片とともに球状土錘が 1 点出土している。

2月12日(火) 雨 SI03 の覆土除去を実施。カマド部分のセクションについては,住居跡の南北セクション

ベルトと連続して設定。床面直上には炭化材が散乱している状況が確認され,焼土が貼り付いている箇所もあった。遺物は土師器片が数点出土したにとどまる。

2月13日(水) 晴れ SI03 の覆土除去,柱穴・周溝掘削および南北セクションベルト写真撮影,SI05 カマドセクション・柱穴セクション図作成,カマド部分完掘を実施。SI03 については柱穴が 4 箇所確認され,床面上には焼土とともに炭化材が多数,倒壊している状況で確認された。遺物は土師器の甕と坏の大型破片がカマド付近より出土。また,球状土錘も 3 点出土した。南北ベルトについては写真撮影が完了したが作図は未了。明日,実施し,ベルト除去後に完掘状況写真の撮影を実施する。SI05 については完掘作業が完了。明日は SI03 のセクション図を作成している間に SI02 の南西部に 2m × 2m の先土器文化層確認トレンチを設定し,鹿沼軽石層まで掘削する予定。

2月14日(木) 晴れ SI03 の南北ベルトセクション図作成・土層注記,ベルト除去,出入口ピットの確認,炭化材の写真撮影・取り上げ,SI02 の先土器文化層確認トレンチの設定・掘削・写真撮影を実施。SI03 については完掘。炭化材については壁際から中心に向かって放射状に倒壊していることが確認できたことから,屋根材が崩落したものと考えられる。炭化材については,(有)三井考測に出土位置の計測を実施してもらうとともに,写真測量も実施。出入口ピットについては,カマドの反対側で確認できた。先土器文化層確認トレンチは,SI02 の南西部に 2m × 2m のものを設定し,鹿沼軽石層まで掘削した。第二黒色帯中から礫が 1 点出土した。人為的に持ち込まれた搬入礫の可能性が高い。本日で現場の作業は全て終了。

(川口)

### 1-3 整理作業の経過

整理作業は平成20年6月5日から12月1日の期間に実施した。遺物については、全点について洗浄・注記・接合作業を行った。接合後、図化する資料を抽出し、実測・採拓を行った。図化に際しては、原則としてEPSON社製カラーキャナーGT-F670を用いてスキャニングしたものを、Macintosh版Illustrator CSを用いてデジタルトレースし、版組を行った。観察表と本文についてはMicrosoft社製Excel 2004 for Mac, Word 2004 for Macを用いて作成した。

遺物の写真はNikon社製デジタル一眼レフカメラD60を用いて撮影し、撮影した画像をMacintosh版Photoshop CSで加工した。遺構図については、調査時に(有)三井考測の三井 猛氏が作成したCADデータ(DXF形式)をMacintosh版Illustrator CSを用いて加工し、最終的にMacintosh版Indesign CSで編集し、校正後に印刷屋へ入稿し、印刷した。報告書の印刷部数は300部である。(川口)



SI04 発掘調査風景



本発掘調査参加者

## 第2章 遺跡の周辺環境

元石川大谷原遺跡は、北緯 36 度 19 分 56 秒、東経 140 度 32 分 30 秒（世界測地系）の茨城県水戸市元石川町字大谷原 2265 番地ほかに所在する先土器時代、縄文時代、古墳時代、平安時代、中・近世の複合遺跡である。遺跡は、涸沼川に注ぎ込む支流の一つである、石川川右岸の標高 28.1～29.0m の台地上に東西 570m、南北 700m の範囲に広がっている（第 3 図）。

遺跡が営まれた台地と低地との比高は 24.0m で、石川川から南西方向に入り込む谷津が入り組んでいる。遺跡が立地する台地は、那珂川・桜川・涸沼川・涸沼に囲まれており、通称「東茨城台地」と呼ばれる洪積台地である（石井・小林 1977）。本遺跡の周辺には先土器時代～近世に至るまでの多数の遺跡が確認されている（第 3 図、第 2 表）。

（川口）



第 3 図 元石川大谷原遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:25,000)

第2表 元石川大谷原遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	所在地	時代・時期	備考
001	谷田貝塚	貝塚	谷田町下ノ内	縄文(前)	昭和47年発掘調査
002	谷田遺跡	集落跡	谷田町下ノ内	縄文(前～晩)・古墳(後)	
003	塙坪遺跡	集落跡	酒門町塙坪	弥生(後)・奈良・平安	
006	下畑遺跡	集落跡	元石川町下畑	縄文(中～後)・古墳(後)	昭和59年発掘調査
056	元石川権現台遺跡	集落跡	元石川町権現台	弥生・古墳	湮滅
069	谷田古墳群	古墳群	酒門町付外	古墳	前方後円1(2), 円5
071	江東古墳群	古墳群	元石川町江東外		円6(10?)
140	乗越沢遺跡	集落跡	元石川町乗越沢	縄文(後)・古墳	
175	大串貝塚	貝塚	塩崎町1015-2外	縄文(前・後)	S11, S18, S60年調査, S45年に国の史跡指定
176	大串遺跡	集落跡/官衙跡/火葬墓	塩崎町1016外	縄文(草創・前・後)・古墳・奈良・平安	S62, S63, H6, H8, H14年調査
177	森戸遺跡	集落跡	森戸町塙	先土器	湮滅
178	向山遺跡	集落跡	大串町向山	縄文(前)・古墳・奈良・平安	S24年調査
179	東前遺跡	集落跡	東前町道漢坂	縄文・古墳(前)	湮滅
180	芳賀遺跡	集落跡	栗崎町宿	奈良・平安	
181	六地藏寺遺跡	集落跡	六反田町818外	弥生(後)・古墳(前)・奈良・平安	
182	西谷津遺跡	集落跡	六反田町西谷津	古墳・奈良・平安	
183	小原遺跡	集落跡	東前町原	弥生(後)・古墳・奈良・平安	
184	新地遺跡	集落跡	六反田町新地	古墳(前～中)・奈良・平安	
185	薄内遺跡	集落跡	六反田町薄内	先土器・縄文(早～後)・弥生(前～後)・古墳(前・後)・奈良・平安・近世	平成19年調査
186	金山塚古墳群	古墳群	大串町原	古墳(後～終)	後円0(1), 円3(5), 金山塚S26年発掘
187	大串古墳群	古墳群	大串町山海2251	古墳(後～終)	後円1, 円1(5)
188	栗崎北古墳	古墳	栗崎町北1751	古墳(後～終)	円1, 横六式石室
189	愛宕神社古墳	古墳	栗崎町上平	古墳(後～終?)	円1
190	六地藏寺古墳	古墳	六反田町薄内	弥生・古墳(後)	後円?1
191	小山古墳群	古墳群	大場町小山外	古墳(後～終?)	円3
192	森戸古墳群	古墳群	森戸町大六天外	先土器・縄文(早～後)・古墳(前・後～終)	後円1, 方0(1), 円15(17)
193	上平遺跡	集落跡	栗崎町上平	古墳・奈良・平安	
194	長福寺古墳群	古墳群	塩崎町寺前	古墳(後～終?)	円7
195	瀬沼台古墳群	古墳群	大場町秋久保	古墳(後～終?)	円7?
196	下入野古墳群	古墳群	下入野町富士山	古墳(後～終)	円8
197	善徳寺古墳	古墳	大串町仲道2301	古墳(後～終?)	円1
198	下入野西古墳群	古墳群	下入野町水走外	古墳(後～終?)	円6
201	橋山館跡	城館跡	東前町金山外	中世	土塁一部残存
202	和平館跡	城館跡	栗崎町上平	中世	土塁一部残存
203	六反田広町遺跡	集落跡	六反田町広町1334外	古墳(前～中)	
235	町付遺跡	集落跡	酒門町町付	古墳(前)・奈良・平安	平成19年調査
236	仲通り貝塚	貝塚	谷田町下ノ内	縄文(前)	
237	下ノ内遺跡	集落跡	谷田町下ノ内	縄文(晩)	
239	中ノ割遺跡	集落跡	坏大野町天神脇	先土器・縄文土器(早～後)・奈良・平安	H3年調査
240	小仲根権現古墳	古墳	元石川町中ノ割942外	古墳(後～終?)	円1
241	小仲根遺跡	集落跡	元石川町小仲根	縄文(中)・古墳(後)・平安	平成14年調査
242	高原古墳群	古墳群	元石川町小仲根	奈良・平安・近世	円2, H3年調査
243	小山遺跡	集落跡	大場町高原・狐塚	縄文(中～後)	H3年調査
244	諏訪前遺跡	集落跡	大場町仲原・天神	縄文・古墳・奈良・平安	H2年調査
245	沢幡遺跡	集落跡	大場町諏訪前455外	縄文・奈良・平安	H2年調査
246	梶内遺跡	集落跡	大場町沢畑936外	先土器・古墳(後)・奈良・平安	H2～5, 7年調査
			大串町梶内	古墳(後)・奈良・平安・近世	
247	高原遺跡	集落跡	大串町高原・後原	縄文・弥生(後)・古墳・奈良・平安・中世・近世	H2年調査
248	北屋敷遺跡	集落跡	大串町北屋敷744-1外	縄文・古墳・奈良・平安・中世・近世	H3年調査
249	北屋敷古墳群	古墳群	大串町北屋敷774-1外	縄文(早～中)・弥生(後)・古墳(中～後)・奈良・平安・中世・近世	H3・H6年調査
250	六反田古墳群	古墳群	百合が丘町		湮滅
251	伊豆屋敷跡	城館跡	栗崎町宿	古墳(後)・奈良・平安・中世	土塁3条, 溝1条, H9年調査
252	上野遺跡	集落跡	栗崎町上野	奈良・平安	
253	仏性寺古墳	古墳	栗崎町上野1985	古墳(後～終?)	円1
254	フジヤマ古墳	古墳	栗崎町新屋1612	古墳(後～終?)	円0(1), S26年調査, 湮滅
255	藤元遺跡	集落跡	栗崎町藤元	古墳	
256	諏訪神社古墳	古墳	栗崎町諏訪下	古墳(後～終?)	円1
257	千勝神社古墳	古墳	栗崎町打越2398	古墳(後～終?)	円1
258	打越遺跡	集落跡	栗崎町打越	奈良・平安	
259	東前原遺跡	集落跡	東前町原	古墳・奈良・平安	
260	住吉神社古墳	古墳	東前町金山	古墳(後～終?)	円1
261	大串原館跡	城館跡	大串町原	中世	方形状の土塁
262	大串原遺跡	集落跡	大串町原	縄文(前)・奈良・平安	
263	宮前遺跡	集落跡	大串町宮前	奈良・平安	
264	東畑古墳	古墳	大串町東畑	古墳	円1
267	天神山古墳	古墳	大場町天神山	弥生(後)・古墳(前)	
268	久保山館跡	城館跡	森戸町久保山・塙	中世	土塁3条(鎌倉・室町)
269	西ノ崎遺跡	集落跡	下入野町西ノ崎	古墳・奈良・平安	
279	道西遺跡	集落跡	六反田町道西	先土器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安	平成16年調査, 湮滅
280	瀬沼川河床遺跡	包蔵地		縄文(早～晩)・弥生(中)・近世	
289	元石川大谷原遺跡	集落跡	元石川町大谷原	先土器・縄文(早・後～晩)・古(後)・奈良・平安・近世	平成19年調査, 湮滅

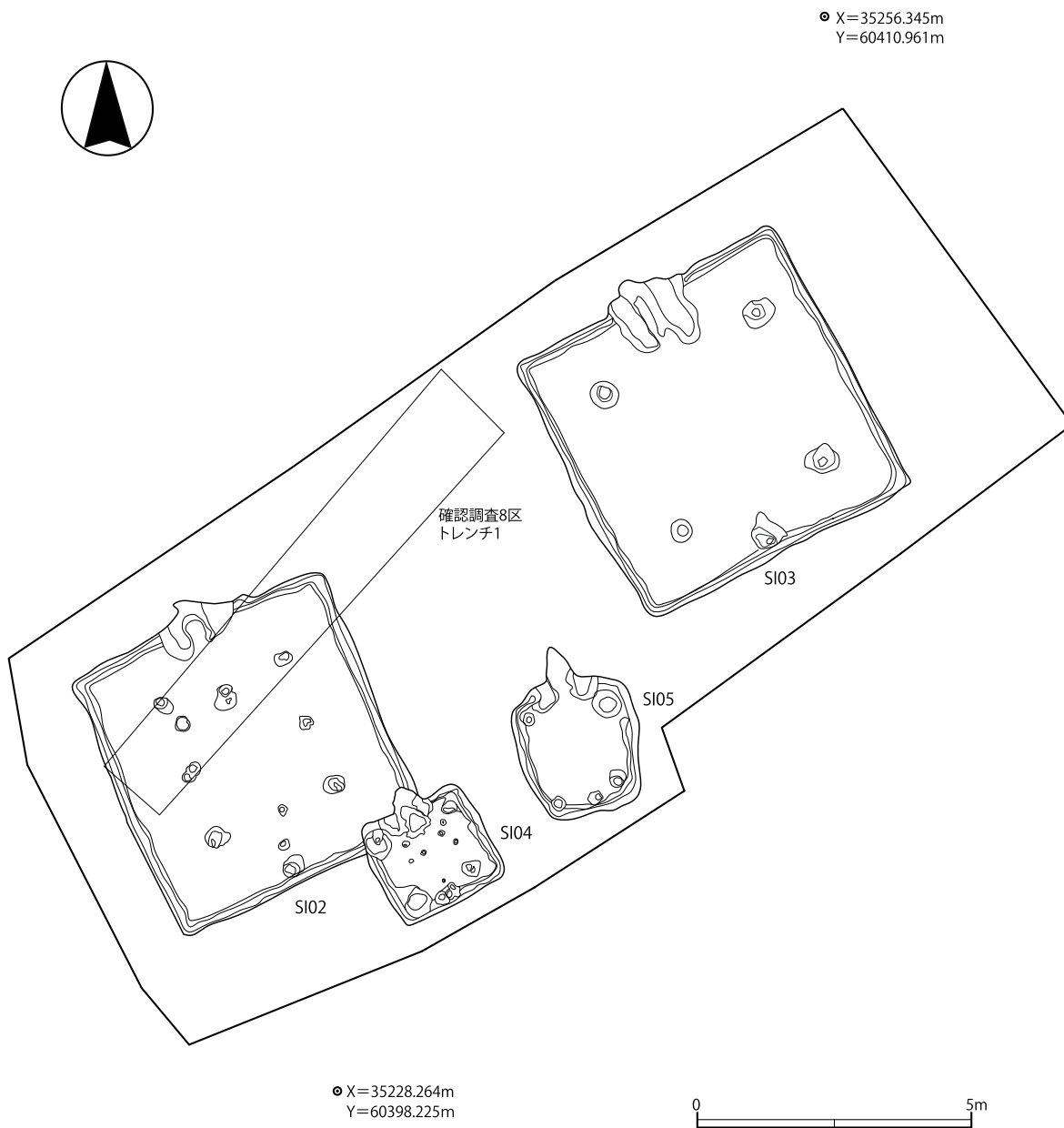
(井上・蓼沼・仁平・根本 1999) に加筆・改変

### 第3章 検出された遺構と遺物

本発掘調査と対象なった遺構は、古墳時代の竪穴建物跡2軒、平安時代の竪穴建物跡2軒（第4図）と確認調査4区トレンチ1で確認された平安時代の竪穴建物跡1軒である（第2図）。

遺物は先土器時代の石器や縄文時代の土器片、土製品、古墳時代の土師器、砥石、土玉、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器、金属製品などが出土した。以下では、時代別に検出された遺構と遺物について記述する。

（川口）

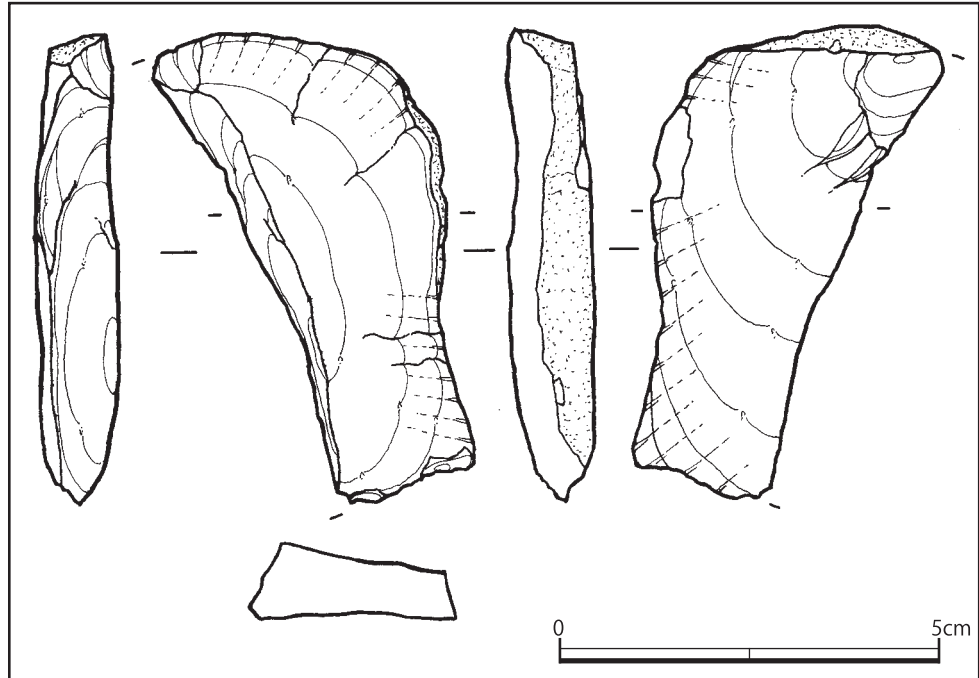


第4図 本発掘調査で確認された遺構



### 3-1 先土器時代

当該期の遺構は確認されていないが、古墳時代の第2号竪穴建物跡の柱穴7から石器が1点出土している(第5図)。第5図は折断剥片である。長さ6.3cm、幅4.2cm、厚さ1.1cm、重量24.0gを測る。図上で左側面とした側に大きな折断面が認められ、背面側から腹面側に向かうリングが観察される。背面には大きな剥離面が1枚観察され、その剥離方向は主要剥離面の方向と直交していることから、打面を時計回りの方向に90°転移させる過程で剥がされたものとみられる。打面は自然面打面で、自然面は左右両側面まで連続している。また、自然面が丸みを帯びていることから、石核の形状は円



第5図 先土器時代の剥片

礫もしくは亜円礫を分割したものであり、分割礫を輪切りにしていく過程で生じたものであることが読み取れる。石材には那珂川流域で採集可能なガラス質黒色安山岩が利用されている。(川口)

### 3-2 縄文時代

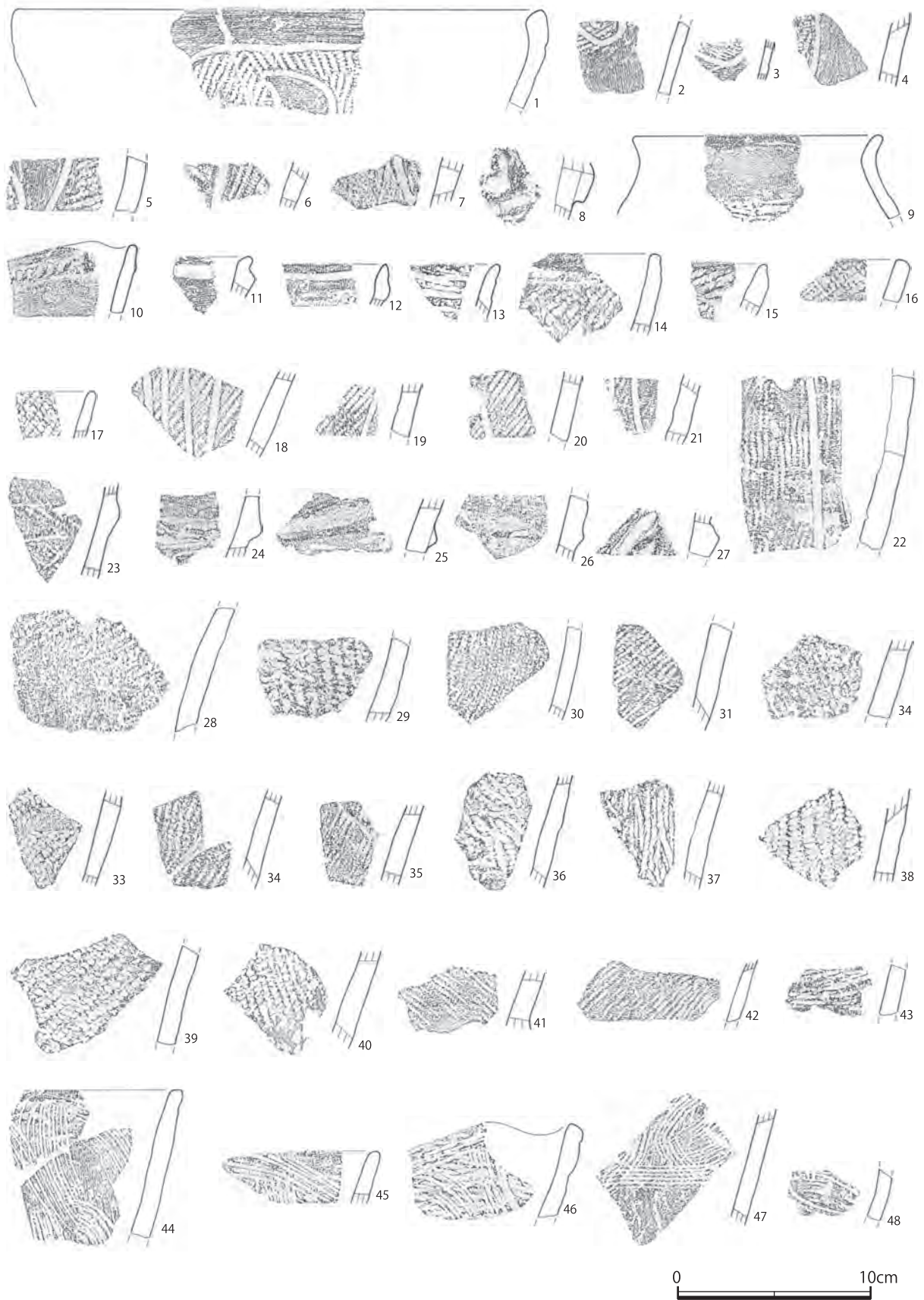
縄文時代の遺構は、調査区内から確認されていない。土器は、後世の遺構の覆土中から検出された破片が大部分であり、これらを一括して報告する。

土器は107点の破片が出土しており、そのうち68点を掲載した(第6・7図)。これらは、後期初頭の「称名寺式」、後期前葉の「堀之内式」、後期中葉の「加曾利B式」の破片である。

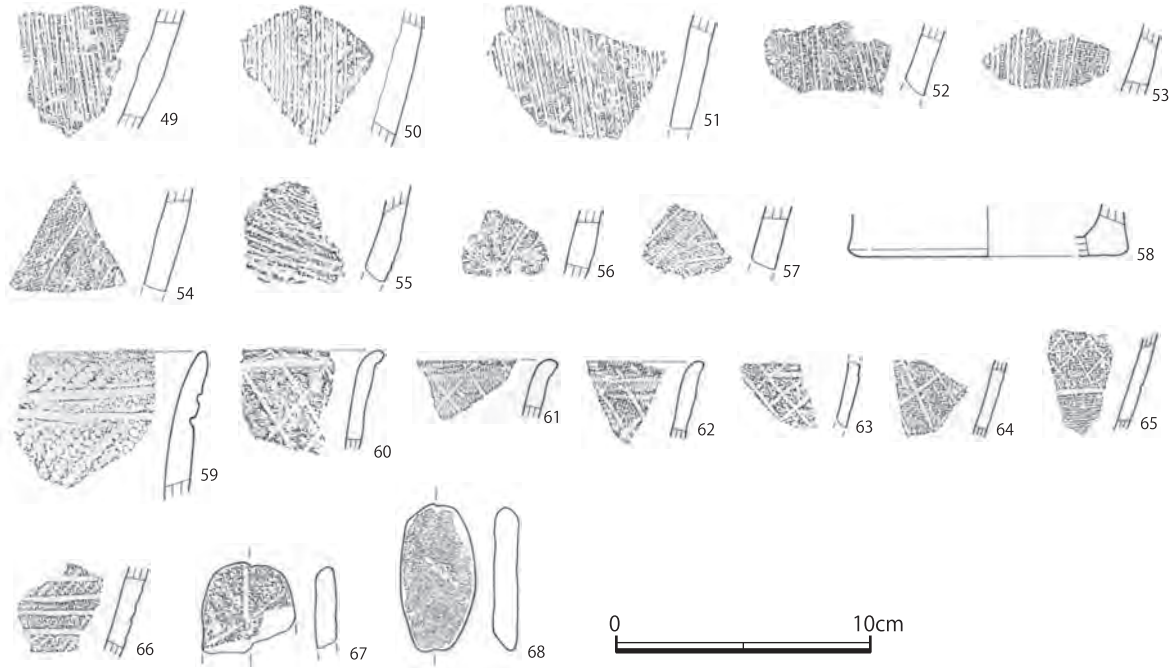
「称名寺式」の分布は、遺跡の東側にあり、確認調査4区のSI01と確認調査4区のトレンチ1の2地点から出土している。「堀之内式」の分布は、遺跡の東側と西側にある。特にSI01から集中的に出土し、確認調査4区のトレンチ3と確認調査8区のSI02・SI05からも数点出土している。「加曾利B式」の分布は、遺跡の東側にあり、SI01から集中的に出土している。

1～8は「称名寺式」に相当する。9は壺形土器と推定され、横位の沈線文が施されている。67・68は土器片錘である。67は格子状文が施文された破片を利用している。68は「幅に対して長さが2倍以上で、両端部が丸みを帯びる形、つまり長楕円形の特徴的な形」で、「君ヶ台型土錘」(鈴木2005・2007)とされたものである。9～58・67・68は「堀之内式」に相当する。59～65は所謂「粗製土器」、66は「精製土器」で、「加曾利B式」に相当する。大谷原遺跡出土の縄文土器は、後期のものがほとんどで、「堀之内式」が比較的多いようである。

(色川)



第6図 遺構外出土の縄文土器



第7図 遺構外出土の縄文土器・土製品

第3表 土器観察表

挿 図	番号	出土位置	計測及び観察	胎 土	焼成	色調(外面・内面)	時 期
第6図	1	調④・T1	法:口276(11), 文:唇無, 縄RL, 沈線文(棒)	砂粒(白・黒・透多)	良好	にぶい黄褐~黒	称名寺1式
	2	SI01	文:縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(白・透多)	良好	にぶい黄橙	称名寺式
	3	SI01	文:縄RL, 沈線文(棒)	砂粒(透)	良好	橙	称名寺式
	4	調④・T1	文:縄RL, 沈線文(棒)	砂粒(透多)	良好	にぶい黄橙	称名寺式
	5	SI01	文:縄RL, 沈線文(棒)	金, 砂粒(白多・透多)	普通	にぶい黄橙	称名寺式
	6	SI01	文:縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(白・黒・透)	普通	にぶい黄橙	称名寺式
	7	SI01	文:縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(白多・透多)	良好	にぶい褐	称名寺式
	8	SI01	文:隆起線文, 備:内剥離	砂粒(白・透)	良好	にぶい橙	称名寺式?
	9	調④・T3	法:口128(12), 文:唇無, 沈線文	砂粒(白多・透多)	良好	にぶい黄橙	堀之内式
	10	SI01	文:唇無, 隆帯(半竹による刺突), 貼付文, 備:波状口縁	砂粒(白多・透多)	普通	黒褐・にぶい黄橙~黒褐	堀之内2式
	11	SI01	文:唇無	砂粒(白多・透多)	良好	明黄褐	堀之内式
	12	SI01	文:唇無, 縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(白多・透多)	普通	にぶい黄	堀之内式
	13	SI01	文:唇無, 縄RL, 沈線文(棒)	砂粒(黒)	良好	にぶい黄橙	堀之内式
	14	調④・T4	文:唇無, 縄LR	砂粒(白多・透多)	良好	黄灰	堀之内式
	15	SI01	文:唇無, 縄LR	砂粒(白・透)	普通	明褐	堀之内式
	16	SI01	文:唇無, 縄LR	砂粒(白多・透多)	良好	褐	堀之内式
	17	SI01	文:唇無, 縄LR	砂粒(白多・透多)	良好	にぶい褐	堀之内式
	18	SI01	文:縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(白・黒・透)	普通	明黄褐	堀之内式
	19	SI01	文:縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(黒多・透多)	良好	橙	堀之内式
	20	SI01	文:縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(白多・透多)	良好	にぶい黄橙	堀之内式
	21	SI01	文:沈線文(棒)	砂粒(黒多・透多)	普通	にぶい黄橙・橙	堀之内式
	22	SI01	文:縄LR, 沈線文(棒)	砂粒(白多・黒・透多)	良好	明黄褐	堀之内式
	23	SI01	文:縄LR・RL, 隆帯?	砂粒(白多・透多)	良好	橙・にぶい黄橙	堀之内式
	24	SI01	文:隆帯, 条線文(櫛)	砂粒(黒多・透多)	良好	にぶい黄褐・橙	堀之内式
	25	SI01	文:隆帯	砂粒(白多・透多)	普通	明黄褐・にぶい黄	堀之内式
	26	SI01	文:隆帯	砂粒(白多・黒・透多)	良好	にぶい黄・黒褐	堀之内式
	27	SI01	文:隆帯	砂粒(白多・透多)	良好	にぶい黄橙	堀之内式
	28	SI01	文:縄LR	金多, 砂粒(白多・透多)	普通	橙・明黄褐~黒褐	堀之内式
	29	SI01	文:縄LR	砂粒(白多・透多)	普通	にぶい黄橙	堀之内式
	30	SI02	文:縄LR	砂粒(白多・透多)	良好	にぶい黄橙・灰黄褐	堀之内式
	31	SI01	文:縄LR	砂粒(黒・透)	良好	にぶい黄橙	堀之内式
	32	SI01	文:縄LR, 備:外剥離	砂粒(白・透)	普通	橙	堀之内式
	33	SI01	文:縄LR	砂粒(黒・透多)	良好	橙・暗灰黄	堀之内式
	34	SI01	文:縄LR	砂粒(白多・黒・透多)	良好	橙	堀之内式
	35	SI01	文:縄LR	砂粒(白多・透多)	良好	橙	堀之内式
	36	調④・T3	文:縄LR	砂粒(白多・透多)	良好	にぶい褐	堀之内式
	37	SI01	文:縄RL	砂粒(白多・黒・透多)	良好	にぶい黄橙・にぶい黄	堀之内式

挿 図	番号	出土位置	計測及び観察	胎 土	焼成	色調 (外面・内面)	時 期
第 6 図	38	SI01	文: 縄 RL	骨針, 砂粒 (白・黒・透多)	普通	暗灰黄・にぶい黄橙	堀之内式
	39	調④・T3	文: 縄 RL	砂粒 (白・透多)	良好	明黄褐	堀之内式
	40	SI01	文: 縄 RL	砂粒 (白・黒・透多)	良好	にぶい黄橙・暗灰黄	堀之内式
	41	調④・T3	文: 縄 RL	金, 砂粒 (白多・透多)	良好	にぶい黄橙・暗灰黄	堀之内式
	42	SI01	文: 縄 L	砂粒 (白多・黒多・透多)	良好	にぶい黄橙・橙	堀之内式
	43	SI01	文: 縄 L	砂粒 (透多)	良好	にぶい黄	堀之内式
	44	SI01	文: 唇無, 条線文 (櫛)	砂粒 (白・黒・透多)	良好	にぶい黄橙・黄灰	堀之内式
	45	SI01	文: 唇無, 条線文 (櫛)	砂粒 (白多・黒多・透多)	良好	暗灰黄	堀之内式
	46	SI01	文: 唇無, 縄 RL, 条線文 (櫛), 備: 波状口縁	砂粒 (白多・透多)	良好	淡黄・黒褐	堀之内式
	47	SI05	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (黒・透多)	良好	にぶい黄橙・黄灰・にぶい黄	堀之内式
第 7 図	48	SI01	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (白多・透多)	良好	にぶい黄橙	堀之内式
	49	SI01	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (白多・透多)	良好	にぶい黄橙・暗灰黄	堀之内式
	50	SI01	文: 条線文 (櫛), 備: 内剥離	砂粒 (黒・透)	良好	黒褐・にぶい黄橙	堀之内式
	51	SI01	文: 条線文 (櫛)	金多, 砂粒 (白多・透多)	良好	淡黄	堀之内式
	52	SI01	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (透)	良好	明黄褐	堀之内式
	53	SI01	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (白多・透多)	良好	橙	堀之内式
	54	SI01	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (白多・透多)	良好	にぶい黄橙・黒褐	堀之内式
	55	SI01	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (白・黒多)	良好	にぶい黄橙・にぶい褐	堀之内式
	56	SI01	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (白・黒多・透)	良好	明黄褐	堀之内式
	57	調④・T4	文: 条線文 (櫛)	砂粒 (白多・透多)	良好	明赤褐	堀之内式
	58	SI01	法: 底 110 (12), 文: 無文	砂粒 (白・透)	良好	橙・暗灰黄	堀之内式
	59	調④・T4	文: 唇無, 縄 LR, 沈線文 (棒)	砂粒 (透多)	良好	明黄褐	加曾利 B 2 式
	60	SI01	文: 唇無, 沈線文 (篋または棒)	金, 砂粒 (白多・透多)	良好	にぶい黄橙・灰黄褐	加曾利 B 2 式
	61	調④・T4	文: 唇無, 沈線文 (篋または棒)	金多, 砂粒 (白多)	良好	黒褐	加曾利 B 2 式
	62	SI01	文: 唇無, 沈線文 (篋または棒)	金, 砂粒 (白多・透多)	良好	明黄褐	加曾利 B 2 式
	63	SI01	文: 沈線文 (篋または棒)	金, 砂粒 (白多・透多)	普通	黒褐・にぶい黄橙	加曾利 B 2 式
	64	SI01	文: 沈線文 (篋または棒)	金	良好	黒褐・にぶい黄橙	加曾利 B 2 式
	65	SI01	文: 沈線文 (篋または棒)	金多, 砂粒 (白多・透多)	良好	黒褐	加曾利 B 2 式
66	SI01	文: 縄 LR, 沈線文 (棒)	砂粒 (白多・透多)	良好	にぶい黄橙・黄灰・明黄褐	加曾利 B 1・2 式	

第 4 表 土製品観察表

挿 図	番号	出土位置	器 種	長径 (mm)	短径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	文 様	時 期
第 7 図	67	調④・T3	土器片錘	* 36	36	9	* 13.0	棒状工具による沈線文	堀之内式
	68	SI01	土器片錘	57	29	9	23.0	無文	堀之内式

・計測値の [ \* ] 付数値は部分的な残存長である。

〈第 3・4 表 凡例〉

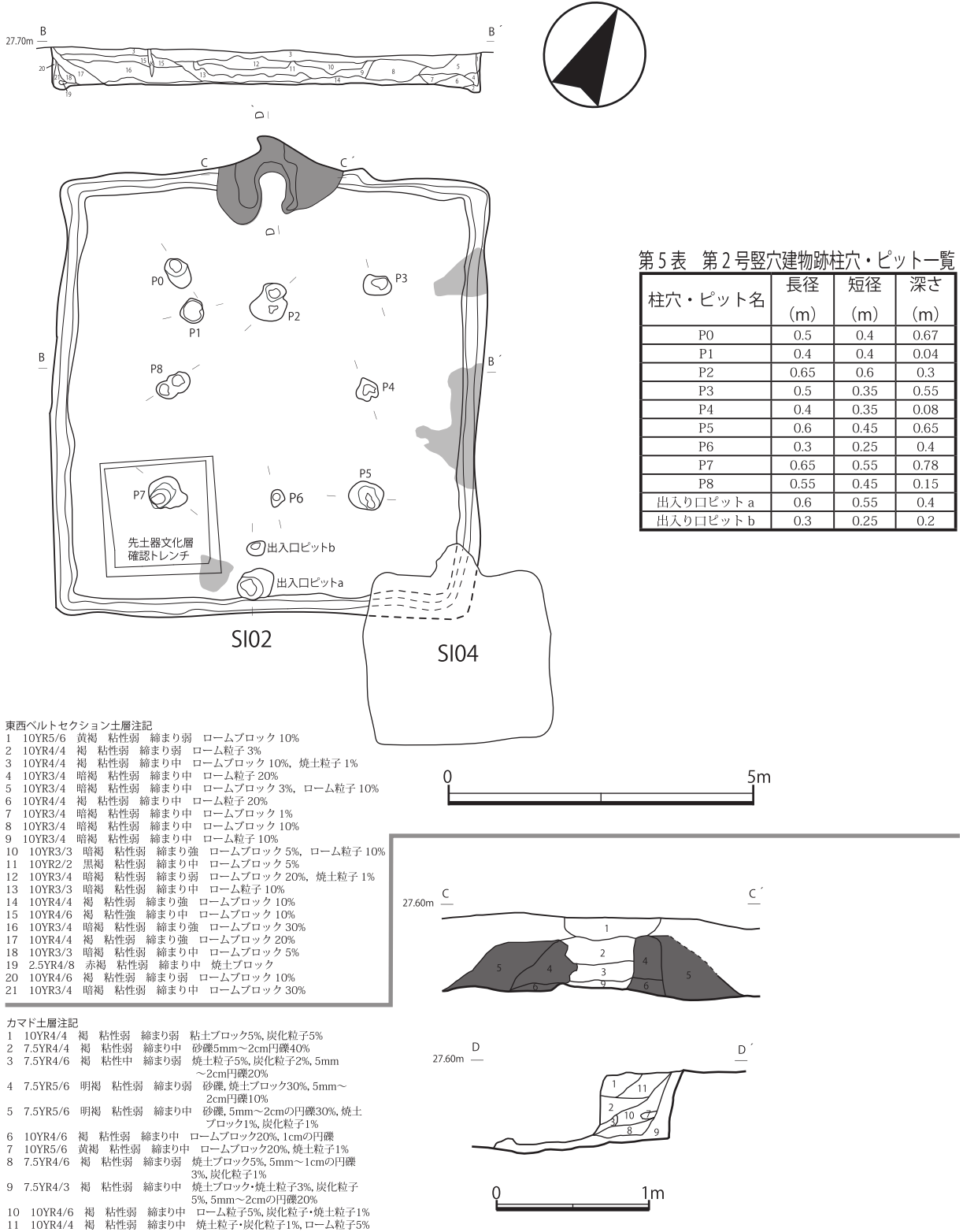
- \* 「出土位置」は、遺構を次のように記号化している。  
「SI」 竪穴建物跡, 「調」 調査区, 「T」 トレンチ
- \* 「計測及び観察」は、次のように記号化して、記載を分けている。  
「法」 法量に関する記載  
「文」 文様の特徴に関する記載 (特に施文工具について記述した。文様の形象については実測図及び拓影図を参照とする。)  
「備」 その他の備考とすべき記載
- \* 「法」の記載には、次の記号で、部位の計測値を表記している。(単位は「mm」, 括弧内の数値は残存率で単位は「%」。)  
「口」 口縁部直径, 「底」 底部直径,
- \* 「文」の記載には、次の記号を使用する。  
「唇」 口唇部の施文 (さらに, 「無」 施文無し, という記号の組み合わせで表記する。)  
「底」 底面の痕跡  
「篋」 篋状工具 (沈線の断面が鋭角的なものを典型とした工具に対する表記。)  
「棒」 棒状工具 (沈線の断面が半円形のを典型とした工具に対する表記。)  
「櫛」 櫛歯状工具 (3 本以上の沈線を同時に施文した工具に対する表記。)  
「縄」 縄文原体
- \* 「備」の記載には、次の記号を使用する。  
「外」 器外面, 「内」 器内面
- \* 「胎」の記載には、次の記号を使用する。  
「金」: 金色を呈する風化した黒雲母片 (さらに, 「多」 含有が多量, という記号の組み合わせで表記する。)  
「骨針」: 白色針状物質とも表記される海綿骨針 (さらに, 「多」 含有が多量, という記号の組み合わせで表記する。)  
「白」: 白色不透明で長石あるいは石英と考えられる粒子 (さらに, 「多」 含有が多量, という記号の組み合わせで表記する。)  
「黒」: 黒色で光沢を有し輝石あるいは角閃石と考えられる粒子 (さらに, 「多」 含有が多量, という記号の組み合わせで表記する。)  
「透」: 透明で石英と考えられる粒子 (さらに, 「多」 含有が多量, という記号の組み合わせで表記する。)

### 3-3 古墳時代

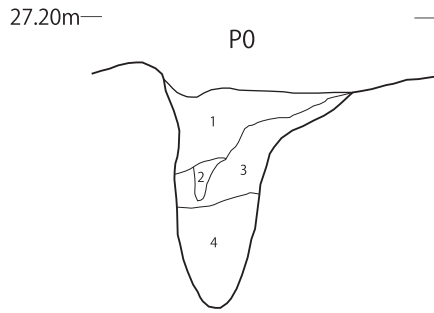
当該期の遺構は7mを超える大形の竪穴建物跡が2棟検出されており、遺構内からは多数の遺物が出土している。

#### (1) 第2号竪穴建物跡

【検出位置】 確認調査8区のトレンチ1において検出され、本調査の際には南東コーナー部分が平安時代に帰属する第4号竪穴建物跡に切られている状況が確認された(第8図)。



第8図 第2号竪穴建物跡



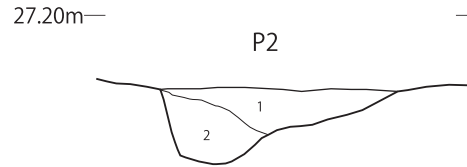
柱穴0土層注記

- 1 10YR4/4 褐 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック 5%
- 2 10YR3/4 暗褐 粘性弱, 締まり弱, ローム粒子 20%
- 3 10YR5/6 黄褐 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック 30%
- 4 10YR5/6 黄褐 粘性弱, 締まり中, ロームブロック 40%



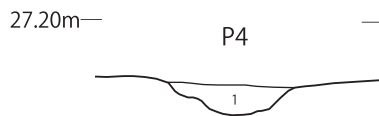
柱穴1土層注記

- 1 10YR3/4 暗褐 粘性弱, 締まり中, ロームブロック 20%, 炭化粒子 5%



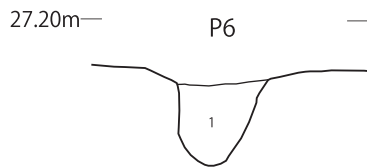
柱穴2土層注記

- 1 10YR3/3 暗褐 粘性弱, 締まり中, ロームブロック 20%, 炭化粒子 10%, 焼土ブロック 1%
- 2 10YR5/6 暗褐 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック 50%



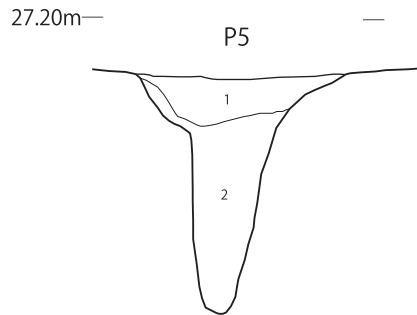
柱穴4土層注記

- 1 10YR3/4 暗褐 粘性弱, 締まり中, ロームブロック 20%



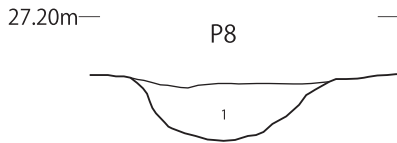
柱穴6土層注記

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐 粘性弱, 締まり中, ロームブロック 20%



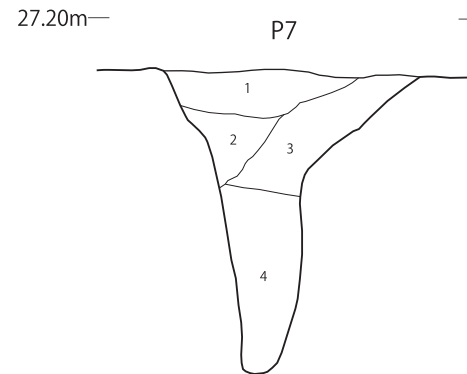
柱穴5土層注記

- 1 10YR3/4 暗褐 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック 20%
- 2 10YR4/4 褐 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック 10%



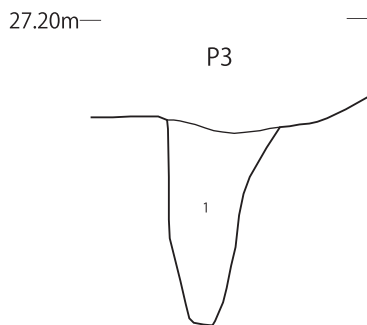
柱穴8土層注記

- 1 10YR3/4 暗褐 粘性弱, 締まり中, ロームブロック 20%



柱穴7土層注記

- 1 10YR3/3 暗褐 粘性弱, 締まり中, ロームブロック 10%, 炭化粒子・焼土粒子 1%
- 2 10YR3/4 暗褐 粘性中, 締まり弱, ロームブロック 20%
- 3 10YR4/4 褐 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック 10%
- 4 10YR4/6 褐 粘性中, 締まり弱, ロームブロック 50%



柱穴3土層注記

- 1 10YR3/4 暗褐 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック 20%, 炭化粒子 1% (下層にロームブロックが多く含まれる)



第9図 第2号竪穴建物跡柱穴セクション

【主軸方位】 N—27°—W。

【規模】 東西 7.3m, 南北 7.8m。

【壁・周溝】 遺構確認面から床面までの壁の深さは 0.4m～0.55m で、周溝は全周している。

【柱穴】 柱穴は合計で 9 基検出されており、出入口ピットとみられる穴が 2 基検出されている。四隅の主柱穴が深く、主柱穴の間の柱穴が浅い構造の特異なものである (第 9 図・第 5 表)。

【カマド】 北側に構築されている。

【覆土】 人為堆積の様相を呈している。南部および東部の床面に焼土の堆積がみられることから、火災により焼失したとみられる。後述するように遺物は完形品が少なく、廃棄された状態で出土していることから、廃絶に伴う人為的放火の可能性はある。

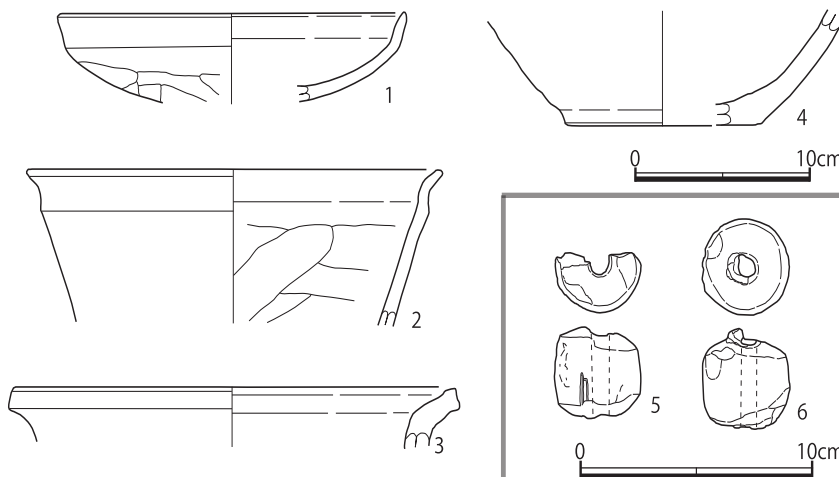
【遺物】 遺物は図化に耐えられる資料として土師器坏 1 点, 土師器鉢 1 点, 土師器甕 2 点, 土玉 2 点を提示する (第 10 図, 第 6 表)。

【時期】 第 10 図-1 の土師器坏の技術的・形態的特徴から、6 世紀後葉頃の住居跡とみられる。

(川口・渥美)

第 6 表 第 2 号竪穴建物跡出土遺物観察表

挿図	番号	種別	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	成形・整形	残存率 (%)	出土位置
第 10 図	1	土師器坏	口径 [15.0], 器高 (3.5)	普通	長石・石英	内面: 灰褐, 外面: 褐灰	内面: 横ナデ, 外面: 口縁部は横ナデ, 体部～底部は横・斜方向のヘラケズリ	20	覆土中
	2	土師器鉢	口径 [18.0], 器高 (6.1)	普通	長石・石英・赤色粒子	内面: 暗灰, 外面: にぶい黄褐	内面: 口縁部は横ナデ, 体部は横・斜方向のナデ, 外面: 口縁部は横ナデ	—	覆土中
	3	土師器甕	口径 [18.0], 器高 (2.4)	普通	長石・石英・雲母	にぶい橙	内外面ともに横ナデ	—	覆土中
	4	土師器甕	底径 [8.4], 器高 (4.6)	普通	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	内面: 斜め方向のナデ, 外面: 横・斜方向のヘラケズリ	5	覆土中
	5	土玉	長さ (2.4), 幅 3.8, 厚さ 3.7, 重量 (30.0), 孔径 0.7～0.8	普通	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	外面指ナデ	50	覆土中
	6	土玉	長さ 3.85, 幅 3.85, 厚さ 4.0, 重量 56.0, 孔径 0.7	普通	長石・石英・角閃石	明黄褐	外面指ナデ	100	カマド中



第 10 図 第 2 号竪穴建物跡出土遺物

## (2) 第 3 号竪穴建物跡

【検出位置】 確認調査 8 区のトレンチ 2 においてコーナー部分が僅かに検出され、本発掘調査でその全容が確認された (第 4 図)。

【主軸方位】 N—27°—W。

【規模】 東西 7.8m, 南北 8.2m。

【壁・周溝】 遺構確認面から床面までの壁の深さは 0.6m～0.7m で、周溝は全周している。

【柱穴】 柱穴は合計で 4 基検出されており、出入口ピットとみられる穴が南壁寄りの位置で 1 基検出されている。柱穴は西側の P1・P4 と東側の P2・P3 で深さに 6cm の差がある。

【カマド】 北側に構築されている。

【覆土】 覆土は 20 層に分層され、自然堆積の様相を呈している。床面直上から炭化材や焼土が検出されており、炭化材は壁際から竪穴の中心に向かって放射状に倒壊した状況で検出されていることから、焼失したとみられる。この炭化材と焼土は、第 11 図では、西側にのみ分布しているように見えるが、調査時には東側の床面にも分布がみられた。しかしながら、本竪穴建物跡の調査に充てられた調査期間は 2 日と短く、記録を作成することが出来な

第7表 第3号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧

柱穴・ピット名	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
P1	0.7	0.7	0.64
P2	0.85	0.7	0.57
P3	0.85	0.75	0.57
P4	0.6	0.55	0.64
出入口ピット	0.85	0.95	0.56

かったことを断っておく。焼失しているものの、遺物は完形に復元できるものが少なく、全て廃棄された状態で出土していることから、廃絶に伴う人為的放火の可能性が考えられよう。

【遺物】 遺物は凶化に耐えられる資料として土師器杯5点、土師器有台杯1点、須恵器無台杯1点、須恵器甕1点、土師器甕9点、砥石1点、土玉4点を提示する(第11図、第8表)。

これらのうち、6の土師器有台杯、7の須恵器無台杯、8の須恵器甕は平安時代の所産であり、流れ込んだものと考えられる。先にも触れたように本竪穴は、自然堆積により埋没したと考えられることから、第3号竪穴建物跡の南西に隣接して営まれている第4号竪穴建物跡や第5号竪穴建物跡の居住者が窪地となっていた第3号竪穴建物跡へ投棄した結果と理解できようか。その他の遺物は古墳時代の所産と理解して良い。

【時期】 1～5の土師器杯の技術的・形態的特徴がTK209並行のものとみられることから、遺構の時期は6世紀末～7世紀前葉頃とみられる。(川口・渥美)



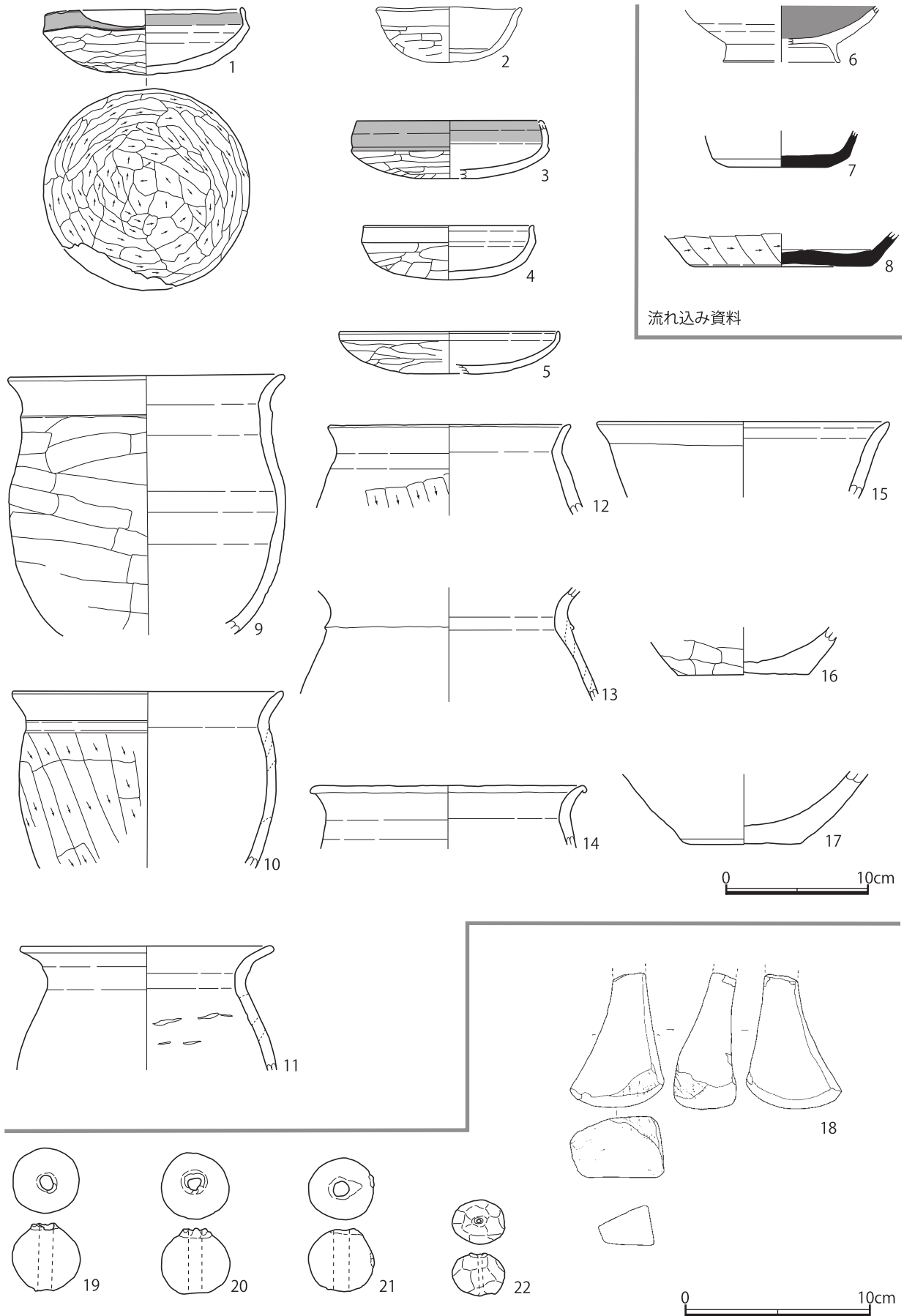
- 1 10YR3/2 黒褐 粘性弱 縮まり中 ローム粒子5%、焼土ブロック1%、1cm大円礫、自然堆積
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐 粘性弱 縮まり弱 粘土ブロック10%、焼土粒子1%、5層が崩落したものか
- 3 5YR4/4 にぶい黄褐 粘性弱 縮まり中 灰・焼土ブロック40%
- 4 10YR4/4 褐 粘性弱 縮まり中 ロームブロック1%、5mm大円礫1%
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐 粘性弱 縮まり中 焼土ブロック50%、煙道のアーチ部分
- 6 5YR4/8 赤褐 粘性弱 縮まり強 焼土ブロック40%
- 7 10YR2/2 黒褐 粘性弱 縮まり中 炭化物10%、焼土ブロック5%
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性弱 縮まり中 炭化材5%、粘土ブロック1%、焼土ブロック5%
- 9 10YR4/4 褐 粘性弱 縮まり中 粘土ブロック20%、焼土粒子・炭化粒子1%
- 10 10YR3/1 黒褐 粘性弱 縮まり中 ローム粒子10%、焼土粒子1%、自然堆積
- 11 10YR6/4 にぶい黄褐 粘性弱 縮まり中 焼土ブロック40%、カマド袖が崩落したものか
- 12 10YR3/3 暗褐 粘性中 縮まり弱 炭化材1%、ローム粒子10%
- 13 10YR4/2 灰黄褐 粘性弱 縮まり中 ローム粒子20%、炭化材10%
- 14 10YR4/6 褐 粘性弱 縮まり強 ロームブロック40%
- 15 10YR2/1 黒 粘性弱 縮まり弱 炭化材5%、ローム粒子1%
- 16 10YR3/2 黒褐 粘性弱 縮まり強 炭化材10%、ローム粒子・ロームブロック20%、焼土ブロック1%
- 17 10YR4/6 粘性弱 縮まり強 ロームブロック40%
- 18 10YR3/2 黒褐 粘性弱 縮まり弱 炭化材40%、ローム粒子5%
- 19 10YR3/3 暗褐 粘性弱 縮まり弱 ロームブロック・ローム粒子20%
- 20 10YR5/4 にぶい黄褐 粘性弱 縮まり弱 焼土ブロック10%、焼土粒子1%、5層が崩落したものか

第11図 第3号竪穴建物跡

第8表 第3号竪穴建物跡遺物属性表

挿図	番号	種別	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	成形・整形	残存率 (%)	出土位置
第12図	1	土師器杯	口径13.8, 器高4.6	普通	長石・石英・海面状骨針	内面: にぶい黄褐, 外面: にぶい黄褐・暗灰	内面: 横ナデ, 外面: 口縁部は横ナデ, 体部～底部は横方向のヘラケズリ, 口縁部～稜部にかけて漆附着	80	床面直上
	2	土師器杯	口径10.6, 器高(4.1)	普通	長石・石英・赤色粒子	内面: にぶい褐, 外面: にぶい黄褐	内面: 横ナデ, 外面: 口縁部横ナデ, 体部横方向のヘラケズリ	50	覆土中
	3	土師器杯	口径15.4, 器高(3.9)	普通	長石・石英	内外面: にぶい黄褐	内面: 横ナデ, 外面: 口縁部は横ナデ, 体部～底部は横方向のヘラケズリ, 口縁部～稜部にかけて漆附着	40	カマド袖部東側～周溝東側
	4	土師器杯	口径12.4, 器高(3.9)	普通	長石・石英・角閃石・赤色粒子	内外面: 灰黄褐	内面: 横ナデ 外面: 口縁部は横ナデ, 体部～底部は横方向のヘラケズリ	60	カマド袖部東側 床面直上
	5	土師器杯	口径16.0, 器高(3.1)	普通	長石・石英・海面状骨針・赤色粒子	内外面: にぶい黄褐	内面: 横ナデ 外面: 口縁部は横ナデ, 体部～底部は横方向のヘラケズリ	20	覆土中
	6	土師器有台杯	器高(4.1), 高台径[8.4]	普通	長石・石英・海面状骨針	内面: 黒, 外面: 橙	内面: 黒色処理 外面: ロクロ水挽き成形痕, 体部は横方向の回転ヘラケズリ	30	遺構確認面





第12図 第3号竪穴建物跡出土遺物

第12図	7	須恵器無台坏	底径 [7.3], 器高 (2.4)	良好	長石・石英・黒色粒子	内面：灰黄褐, 外面：黄灰	内外面ともにロクロ水挽き成形痕, 面～体部下半に自然有付着	30	覆土中
	8	須恵器甕	底径 [13.0], 器高 (2.4)	良好	長石・石英・海面状骨針・黒色粒子	内外面：灰	底面不整方向のヘラケズリ, 体部は横方向のヘラケズリ	5	遺構確認面
	9	土師器甕	口径 [20.0], 器高 (18.8)	普通	長石・石英・角閃石	内面：橙, 外面：橙	内面：横ナデ, 外面：口縁部は横ナデ, 体部は斜方向のヘラケズリ	25	カマド袖部東側床面直上
	10	土師器甕	口径 [19.6], 器高 (12.7)	普通	長石・石英・チャート礫	内外面：橙	内面：横ナデ, 外面：口縁部は横ナデ, 体部は斜方向のヘラケズリ	15	カマド袖部東側床面直上
	11	土師器甕	口径 [18.2], 器高 (9.0)	普通	長石・石英・海面状骨針	内外面：にぶい黄橙	内外面：横ナデ	10	覆土中
	12	土師器甕	口径 [17.4], 器高 (6.6)	普通	長石・石英・赤色粒子	内外面：にぶい黄橙	内面：横ナデ, 外面：口縁部は横ナデ, 体部は斜方向のヘラケズリ	5	周溝
	13	土師器甕	器高 (8.2)	普通	長石・石英・赤色粒子	内外面：にぶい黄褐	頭部は横ナデ	2	覆土中
	14	土師器甕	口径 [20.0], 器高 (4.6)	普通	長石・石英・海面状骨針・赤色粒子	内外面：橙	内外面：横ナデ	2	覆土中
	15	土師器甕	口径 [21.2], 器高 (5.5)	普通	長石・石英・角閃石・赤色粒子	内面：にぶい黄橙, 外面：灰黄褐	内外面：横ナデ	2	カマド袖部東側
	16	土師器甕	底径 [9.7], 器高 (3.5)	普通	長石・石英・赤色粒子	内面：にぶい橙, 外面：橙	内面：不整方向ナデ, 外面：横ヘラケズリ	5	カマド袖部東側
	17	土師器甕	底径 [8.2], 器高 (5.1)	普通	長石・石英	内外面：にぶい黄褐	内面：横ナデ, 外面：横ナデ	5	床面直上
	18	砥石	長さ (7.3), 幅 5.05, 厚さ 3.3, 重量 (108.0)	—	—	—	全面研磨を受けている	—	出入り口ピット
	19	土玉	長さ 3.6, 幅 3.7, 厚さ 3.75, 重量 47.0, 孔径 0.8	普通	長石・石英	内外面：にぶい黄橙	指頭押圧痕	100	覆土中
	20	土玉	長さ 3.7, 幅 3.7, 厚さ 3.4, 重量 46.0, 孔径 0.7	普通	長石・石英	内外面：にぶい黄橙	指頭押圧痕	100	覆土中
	21	土玉	長さ 3.35, 幅 3.55, 厚さ 3.4, 重量 38.0, 孔径 0.8	普通	長石・石英・海面状骨針	内外面：にぶい黄橙	指頭押圧痕	100	覆土中
	22	土玉	長さ 2.45, 幅 2.95, 厚さ 2.3, 重量 15.0, 孔径 0.3	普通	長石・石英・角閃石	内外面：にぶい褐	指ナデ	100	覆土中

### 3-4 平安時代

当該期の遺構は竪穴建物跡が3棟検出されており、遺構内からは多数の遺物が出土している。

#### (1) 第1号竪穴建物跡

【検出位置】 確認調査区4のトレンチ4において検出された(第2図)。

【主軸方位】 N-22°-W。

【規模】 遺構の半分が切土工事により失われていたが、コーナー部分が2箇所残存しており、その距離が4.6mを測ることから(第13図)、一辺約4.6m四方の隅丸方形のプランを呈していたと推定される。推定復元面積は21.16㎡である。

【壁・周溝】 壁の深さは0.52~0.6mで、周溝は北側にのみ残存しており、幅は0.16~0.4m、深さは0.05m程である。

【柱穴・ピット】 柱穴は2箇所確認されている。北側のP1とP2は竪穴住居跡の主軸と平行し、柱間の距離が2mであることから、主柱穴とみられ、南側のP3は位置関係から出入り口ピットの可能性がある。柱穴・ピットの規模は第9表のとおりである。P1とP2では床面からの掘削深度が異なっており、柱用材に長さの揃った規格材を用いず、不揃いな長さの柱用材を用いたことから、個々の柱用材の長さに応じて、柱穴の深さを調節して掘削した結果と考えられる。

【床面】 床面には硬化面が確認され、その範囲はP1とP2および壁に近接した部分に見られないことから、竪穴の中心部分が主として使用されていたと考えられる。ただし、出入り口ピットと推定されるP3付近では、壁に近接した部分にも硬化の範囲が認められ、P3と壁の間には硬化の範囲が認められないことから、柱の上に板などを載せた階段状の施設が存在し、P3の左右に降りていた可能性が推定される。

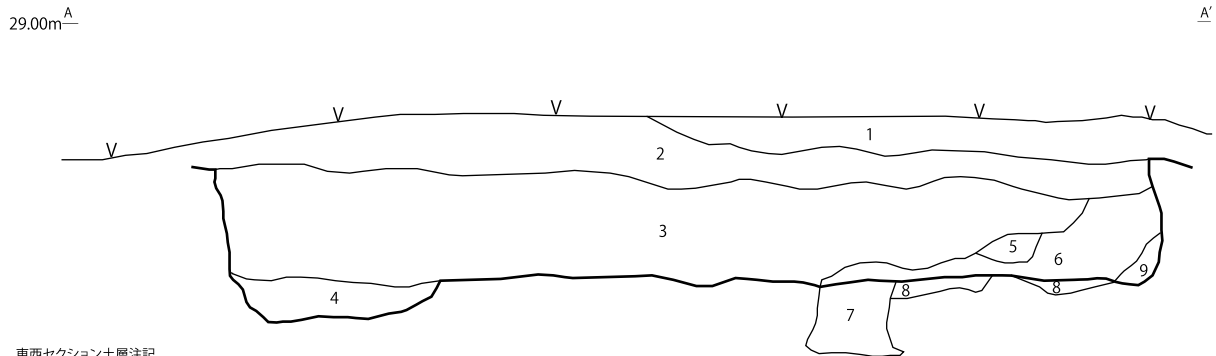
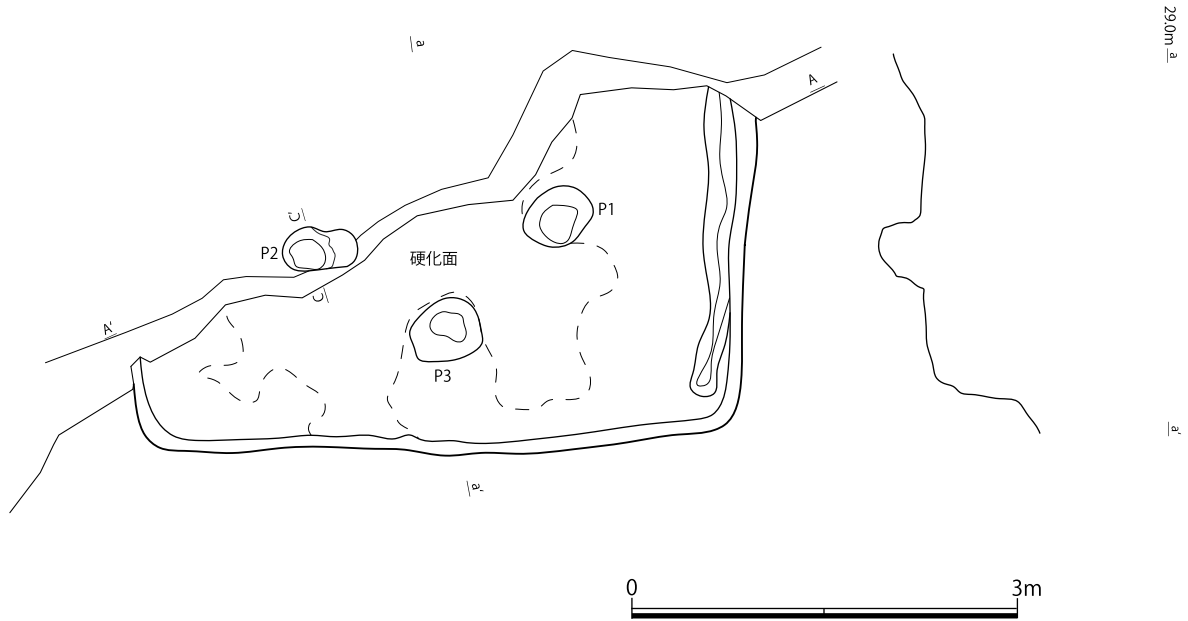
【カマド】 切土工事により失われているものと推定される。

【覆土】 覆土は5つの土層から構成される。3層が厚く堆積しており、ロームブロックやローム粒子、焼土や炭化粒子などを含んでいることから人為的な埋め戻しによる埋没と考えられる。

【遺物】 土師器、須恵器、灰釉陶器の長頸瓶、鉄製品が出土している。ここでは図化に耐えられる25点を提示する(第14図・第10表)。

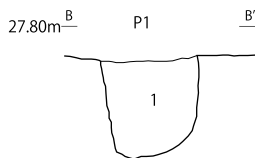
【時期】 第14図-1~5, 8の須恵器無台坏, 6・7の須恵器有台坏, 11~14の内面黒色処理土師器坏の技術的・形態的特徴が9世紀後葉頃のものであることから、9世紀第III四半期以降に廃絶したと考えられる。

(川口・渥美)



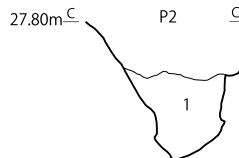
東西セクション土層注記

1. 10YR3/4(暗褐色), 粘性弱, 締まり弱, ローム粒1%, 表土
2. 10YR2/3(黒褐色), 粘性弱, 締まり中, ローム粒1%, 炭化粒1%
3. 10YR3/4(暗褐色), 粘性中, 締まり中, ローム粒・ロームブロック20%, 炭化物1%, 床面直上に土師器・須恵器片含む
4. 10YR5/6(黄褐色), 粘性弱, 締まり中, ローム粒・ロームブロック30%, 貼り床埋土
5. 10YR4/4(褐色), 粘性弱, 締まり中, ロームブロック20%, 焼土粒・炭化粒1%
6. 10YR3/4(暗褐色), 粘性中, 締まり弱, ローム粒10%, 炭化粒・焼土粒1%
7. 10YR5/6(黄褐色), 粘性弱, 締まり弱, ロームブロック40%, Ag, Kpブロック10%, 柱掘り方埋土, 確認面から65cm下がる
8. 10YR4/6(褐色), 粘性弱, 締まり中, ロームブロック30%(貼り床埋土)
9. 10YR4/6(褐色), 粘性弱, 締まり弱, ローム粒30%, 炭化物1%



P1土層注記

1. 10YR3/4(暗褐色), 粘性中, 締まり中, ロームブロック5%, 柱掘り方埋土



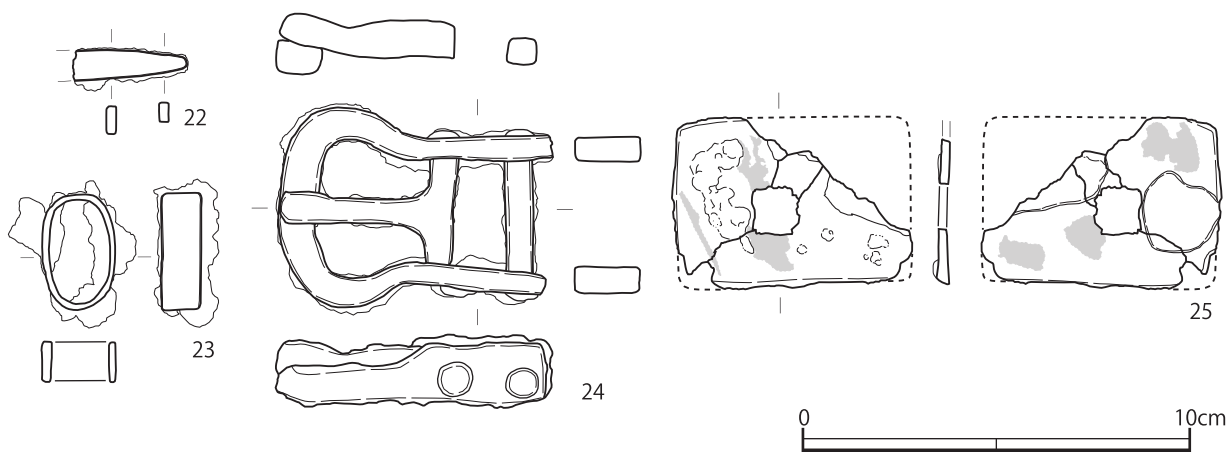
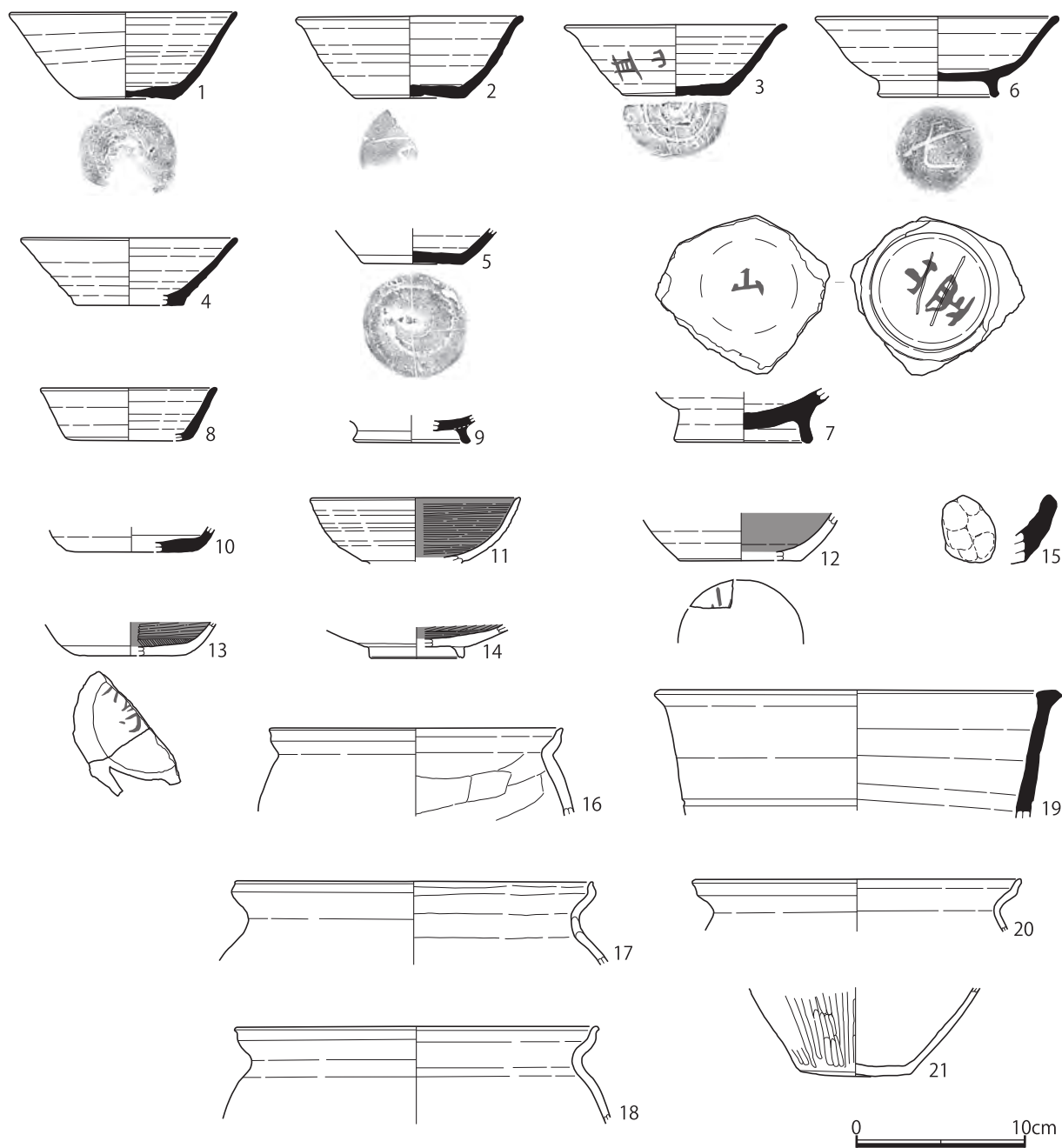
P2土層注記

1. 10YR3/2(暗褐色), 粘性中, 締まり中, ロームブロック5%, 柱掘り方埋土

第9表 第1号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧

柱穴・ピット名	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
P1	0.54	0.44	0.54
P2	0.56	0.34	0.90
P3	0.52	0.46	0.40

第13図 第1号竪穴建物跡



第 14 图 第 1 号竖穴建物跡出土遺物

第10表 第1号竪穴建物跡出土遺物観察表

挿図	No.	種別	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	成形・整形	残存率 (%)	出土位置	
第14図	1	須恵器無台坏	口径：13.8, 器高：5.3, 底径：5.9	良好	長石・石英・海綿状骨針	外面：灰白, 内面：灰黄	内外面：ロクロ水挽成形, 底面：回転ヘラ切り→「#」銘ヘラ記号	75	覆土下層～床直	
	2	須恵器無台坏	口径：[13.9], 器高：5.0, 底径：[6.6]	良好	長石・石英・海綿状骨針・チャート礫	内外面：灰	内外面：ロクロ水挽成形, 底面：回転ヘラ切り→ヘラケズリ→「十」ヘラ記号	40	3層中部～下部	
	3	須恵器無台坏	口径：[13.6], 器高：(4.3), 底径：[6.5]	良好	長石・石英・海綿状骨針	内外面：灰黄	内外面：ロクロ水挽成形, 外面に横方向の「其山カ」, 底面：回転ヘラ切り→「二」銘ヘラ記号	40	3層	
	4	須恵器無台坏	口径：[13.2], 器高：(4.1), 底径：[6.5]	良好	長石・石英・海綿状骨針・チャート礫	内外面：灰	内外面ともにロクロ水挽成形	20	柱穴覆土, 3層中部	
	5	須恵器無台坏	器高：(2.0), 底径：6.1	良好	長石・石英・海綿状骨針	内外面：灰黄	内外面：ロクロ水挽成形底面：回転ヘラ切り→ヘラケズリ, 「十」銘ヘラ記号	10	覆土中層	
	6	須恵器有台坏	口径：[14.9], 器高：(4.9), 高台径：7.4	良好	長石・石英	内外面：にぶい黄	内外面：ロクロ水挽成形底面：回転ヘラ切り→「七」銘ヘラ記号	40	周辺表採	
	7	須恵器有台坏	器高：(2.3), 高台径：6.25	やや甘い	長石・石英・海綿状骨針・チャート礫	内外面：灰白	内外面：ロクロ水挽成形, 底面：回転ヘラ切り→高台部貼付, 「二」銘ヘラ記号→「山」銘墨書, 内面：見込「山」銘墨書	10	床直	
	8	須恵器無台坏	口径：[10.8], 器高：(3.2), 底径：[3.2]	良好	長石・石英・海綿状骨針・チャート礫	内面：灰オリーブ, 外面：にぶい黄褐	内外面：ロクロ水挽成形, 底面：回転ヘラ切り→ヘラケズリ	20	3層下部	
	9	須恵器有台坏	器高：(1.7), 高台径：[7.1]	良好	長石・石英・チャート礫	内外面：灰	底面：回転ヘラ切り→高台部貼付	5	焼土・炭・礫集中部	
	10	須恵器無台坏	器高：(1.4), 底径：[8.0]	良好	長石・石英・海綿状骨針	外面：暗灰黄, 内面：灰黄褐	内外面：ロクロ水挽成形, 底面：回転ヘラケズリ	5	覆土3層中部	
	11	土師器無台坏	口径：[12.8], 器高：(4.0), 底径：[5.6]	普通	長石・石英・海綿状骨針	外面：にぶい黄橙, 内面：暗灰	外面：ロクロ水挽成形, 底面：回転ヘラ切り, 内面：研磨黒色処理	10	3層下部	
	12	土師器無台坏	器高：(2.9), 底径：[7.6]	普通	長石・石英・赤色粒子・海綿状骨針	外面：橙, 内面：暗灰	外面：ロクロ水挽成形→横方向のヘラケズリ, 底面：回転ヘラ切り→ヘラケズリ→「山」銘墨書, 内面：研磨黒色処理	5	3層中部	
	13	土師器無台坏	器高：(2.1), 底径：7.0	普通	長石・石英・赤色粒子	外面：にぶい橙, 内面：暗灰	外面：ロクロ水挽成形, 底面：回転糸切り→ヘラケズリ→墨書「伸寺カ」, 内面：研磨黒色処理	10	3層中部～下部	
	14	土師器高台付坏	器高：(2.0), 高台径：[5.8]	普通	長石・石英・海綿状骨針・チャート礫	外面：橙, 内面：暗灰	外面：ロクロ水挽成形→横方向のヘラケズリ, 底面：回転ヘラ起こし, 内面：研磨黒色処理	10	3層	
	15	須恵器瓶把手	長さ：(4.2), 幅：3.3	やや甘い	長石・石英・チャート礫	内外面：灰白	全面に指圧痕	1	中層	
	16	土師器裹	口径：[17.9], 器高：(5.4)	普通	長石・石英・角閃石・海綿状骨針	外面：橙, 内面：にぶい橙	外面：横方向のナデ, 内面：横方向・斜め方向のナデ	5	3層	
	17	土師器裹	口径：[21.8], 器高：(5.1)	普通	長石・石英・雲母	内外面：橙	外面：横方向のナデ, 内面：横方向・斜め方向のナデ	2	3層	
	18	土師器裹	口径：[22.1], 器高：(5.9)	普通	長石・石英・角閃石	内外面：赤褐	外面：横方向のナデ, 内面：横方向のナデ	2	3層	
	19	須恵器瓶	口径：[24.8], 器高：(8.8)	良好	長石・石英・海綿状骨針・チャート礫・角閃石	内面：灰黄褐, 外面：にぶい黄橙	内外面：ロクロ水挽成形	2	ベルト	
	20	土師器裹	口径：[20.0], 器高：(3.2)	やや甘い	長石・石英・雲母	内外面：灰褐	外面：横方向のナデ, 内面：横方向のナデ	2	焼土・炭・礫集中部	
	21	土師器裹	器高：(5.4), 底径：6.8	普通	長石・石英・雲母	内外面：にぶい橙	外面：体部は縦方向のヘラミガキ, 底面：未調整, 内面：横ナデ	5	3層中部～下部	
	22	鉄製刀子	長さ：(3.0), 幅：(0.8), 厚さ：0.25, 重量：2.0	—	—	—	—	—	3層	
	23	鉄製繩	長さ：3.8, 幅：3.4, 厚さ：1.7, 重量：9.0	—	—	—	—	—	100	3層
	24	鉄製鉸具	長さ：6.25, 幅：8.2, 厚さ：2.7, 重量：94.0	—	—	—	—	—	100	3層
	25	鉄製錠?	長さ：(4.6), 幅：(6.4), 厚さ：(0.7), 重量：14.0	—	—	—	—	—	50	3層

(2) 第4号竪穴建物跡

【検出位置】 古墳時代の第2号竪穴建物跡を切る形で検出された(第4図・第15図)。

【主軸方位】 N—27°—W。

【規模】 東西3.2m, 南北3.4m。

【壁・周溝】 遺構確認面から床面までの壁の深さは0.45～0.5mで周溝は全周している。

【柱穴・ピット】 柱穴は隅に4基確認されている。また, カマドに寄った中央部の床面で6基のピットが確認されている(第11表)。棚等を支えるためのピットであろうか。南側には出入り口ピットが確認されている。

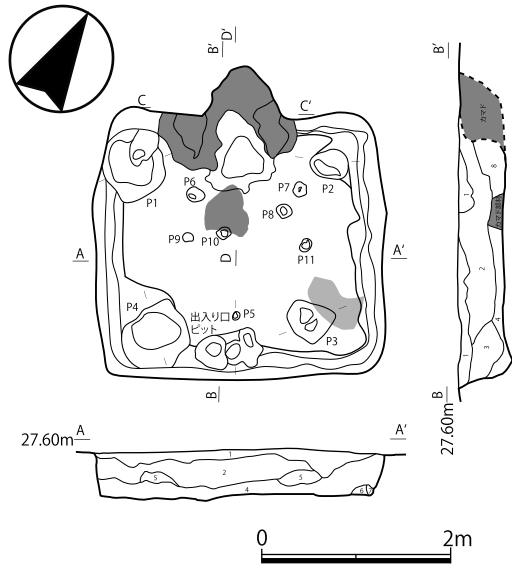
【カマド】 北側で確認されている。

【覆土】 覆土は8層から構成され, 人為的埋め戻しによる埋没と考えられる。

【遺物】 土師器, 須恵器が出土している。ここでは図化に耐えられる15点を提示する(第16図・第12表)。これらのうち, 4の土師器坏は古墳時代の所産であり, 流れ込んだものと考えられる。その他の遺物は平安時代の所産と理解して良い。

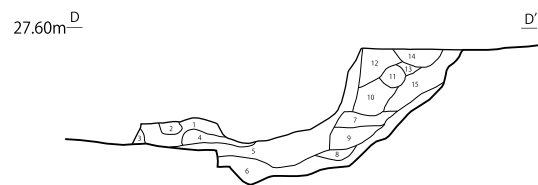
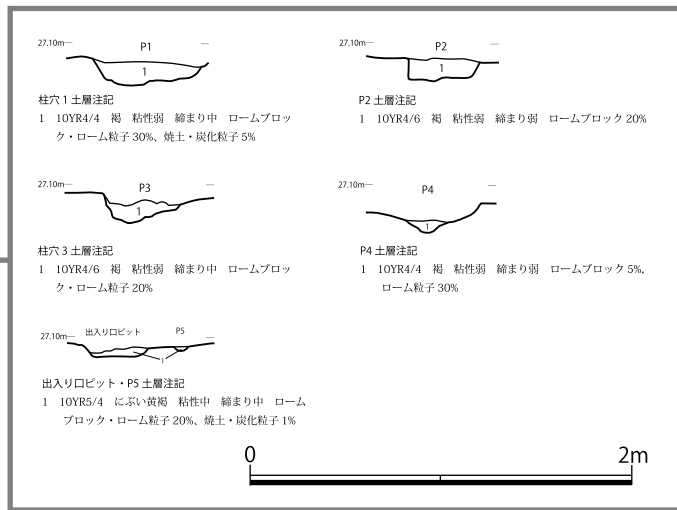
第11表 第4号竪穴建物跡柱穴・ピット一覧

柱穴・ピット名	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)
P1	0.8	0.7	0.23
P2	0.4	0.3	0.19
P3	0.55	0.45	0.21
P4	0.75	0.75	0.22
出入り口ピット	0.75	0.45	0.14
P5	0.1	0.1	0.05
P6	0.2	0.15	—
P7	0.15	0.1	—
P8	0.2	0.15	—
P9	0.1	0.1	—
P10	0.15	0.15	—
P11	0.15	0.1	—



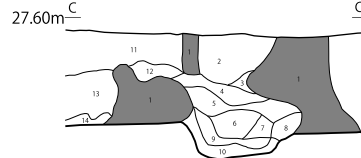
東西・南北セクション土層注記

- 1 10YR6/4 褐 粘性弱 締まり中 ローム粒子20%、  
焼土・炭化粒子1%
- 2 10YR4/4 褐 粘性弱 締まり中 ロームブロック・ロ  
ーム粒子20%、焼土・炭化粒子1%
- 3 10YR4/6 褐 粘性弱 締まり中 ロームブロック1%、  
ローム粒子20%、焼土粒子5%
- 4 10YR3/4 暗褐 粘性弱 締まり中 ローム粒子10%、  
焼土・炭化粒子5%
- 5 10YR3/4 暗褐 粘性弱 締まり強 ロームブロック5%、  
炭化粒子1%
- 6 10YR6/6 明黄褐 粘性中 締まり中 ローム屑(地山)
- 7 10YR4/4 褐 粘性弱 締まり中 ロームブロック5%
- 8 10YR4/4 褐 粘性弱 締まり中 ローム粒子15%、焼土  
粒子3%



カマド南北セクション土層注記

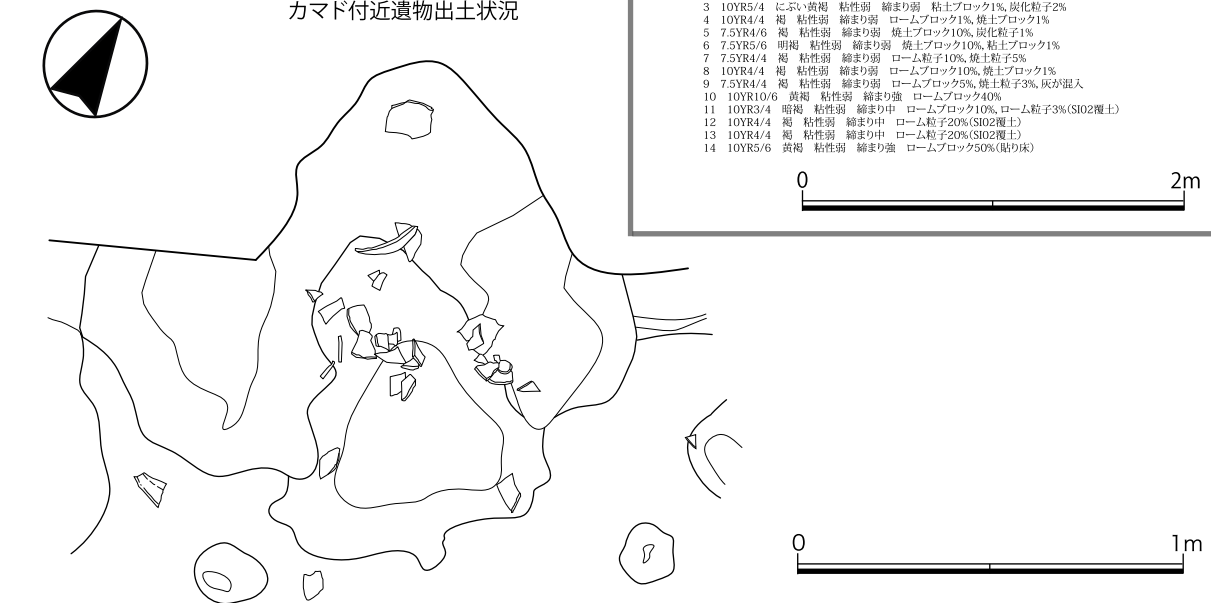
- 1 10YR3/3 暗褐 粘性中 締まり中 ローム粒子5%(崩壊したカマド構築材)
- 2 10YR5/6 黄褐 粘性弱 締まり中 ローム粒子5%(崩壊したカマド構築材)
- 3 10YR3/4 暗褐 粘性中 締まり中 ローム粒子7%(崩壊したカマド構築材)
- 4 10YR3/4 暗褐 粘性中 締まり中 ローム粒子7%(崩壊したカマド構築材)
- 5 10YR2/2 黒褐 粘性中 締まり弱 ローム粒子3%、焼土粒子1%、炭化粒子7%
- 6 10YR4/2 灰黄褐 粘性中 締まり弱 ローム粒子5%、焼土粒子3%、灰混入
- 7 7.5YR4/3 褐 粘性中 締まり弱 焼土粒子7%(崩壊した天井内側直上)
- 8 5YR3/4 暗褐 粘性弱 締まり弱 灰及び焼土
- 9 5YR3/6 暗赤褐 粘性弱 締まり強 焼土ブロック20%
- 10 10YR6/6 明黄褐 粘性弱 締まり中 粘土ブロック20%、焼土ブロック5%(カマドの煙道)
- 11 5YR3/6 暗赤褐 粘性弱 締まり中 焼土ブロック5%、炭化粒子5%
- 12 7.5YR4/4 褐 粘性弱 締まり中 ロームブロック1%、灰・焼土ブロック5%
- 13 7.5YR5/4 にぶい褐 粘性弱 締まり弱 焼土・炭化粒子1%
- 14 5YR4/6 赤褐 粘性弱 締まり中 焼土ブロック20%、粘土ブロック5%、5mm~1cm大の礫5%
- 15 7.5YR5/4 にぶい褐 粘性弱 締まり弱 焼土ブロック1%、灰



カマド東西セクション土層注記

- 1 10YR6.4 にぶい黄褐 粘性弱 締まり中 砂、5mm~1cmの円礫(カマド構築材)
- 2 10YR3/4 暗褐 粘性弱 締まり弱 ローム粒子1%、焼土粒子3%
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐 粘性弱 締まり弱 粘土ブロック1%、炭化粒子2%
- 4 10YR4/4 褐 粘性弱 締まり弱 ロームブロック1%、焼土ブロック1%
- 5 7.5YR4/6 褐 粘性弱 締まり弱 焼土ブロック10%、炭化粒子1%
- 6 7.5YR5/6 明褐 粘性弱 締まり弱 焼土ブロック10%、粘土ブロック1%
- 7 7.5YR4/4 褐 粘性弱 締まり弱 ローム粒子10%、焼土粒子5%
- 8 10YR4/4 褐 粘性弱 締まり弱 ロームブロック10%、焼土ブロック1%
- 9 7.5YR4/4 褐 粘性弱 締まり弱 ロームブロック5%、焼土粒子3%、灰が混入
- 10 10YR10/6 黄褐 粘性弱 締まり強 ロームブロック0%
- 11 10YR3/4 暗褐 粘性弱 締まり中 ロームブロック10%、ローム粒子3%(S102覆土)
- 12 10YR4/4 褐 粘性弱 締まり中 ローム粒子20%(S102覆土)
- 13 10YR4/4 褐 粘性弱 締まり中 ローム粒子20%(S102覆土)
- 14 10YR5/6 黄褐 粘性弱 締まり強 ロームブロック50%(貼り床)

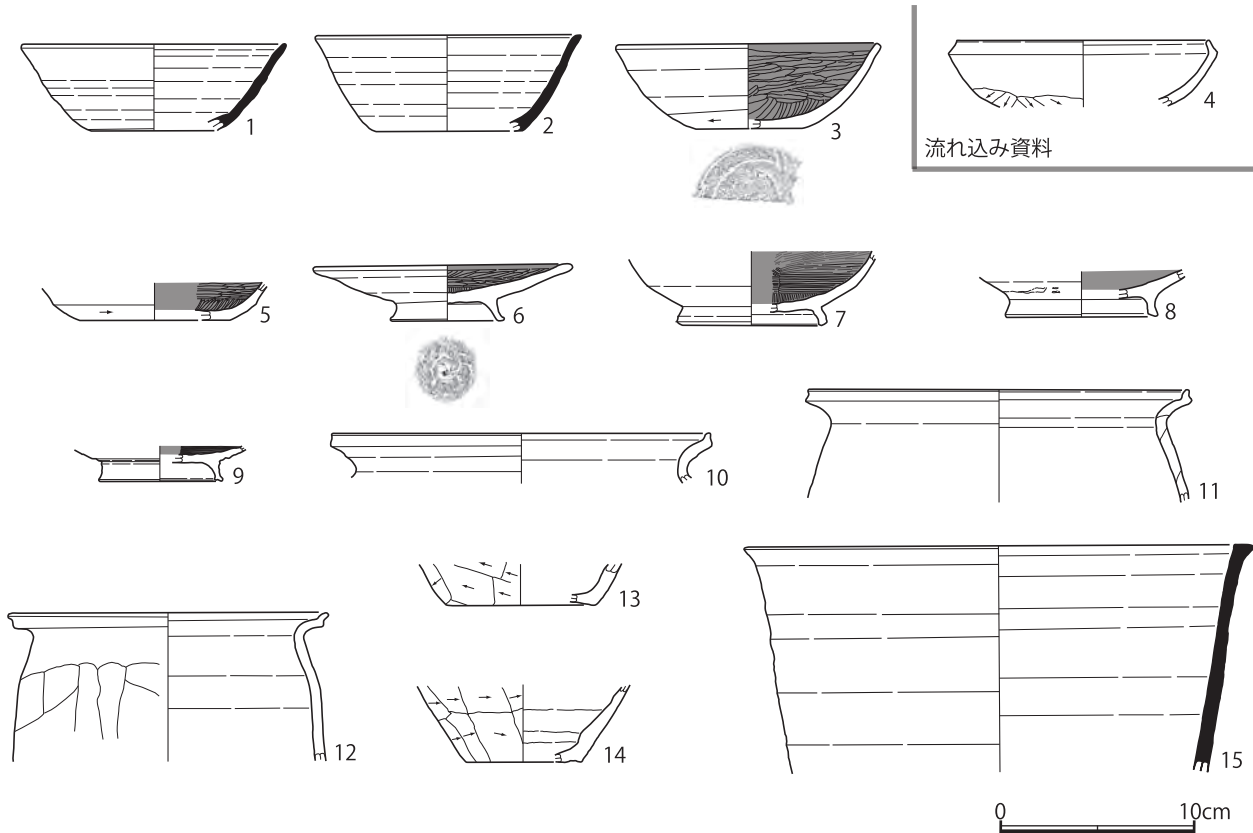
カマド付近遺物出土状況



第15図 第4号竪穴建物跡

【時期】 1・2の須恵器無台坏および5～9の内面黒色処理土師器無台坏・高台付皿・高台付碗の技術的・形態的特徴が9世紀中葉～後葉頃のものであることから、遺構の時期は9世紀中葉～後葉とみられる。

(川口・渥美)



第16図 第4号竪穴建物跡出土遺物

第12表 第4号竪穴建物跡出土遺物観察表

挿図	No.	種別	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	成形・整形	残存率 (%)	出土 位置
第16図	1	須恵器無台坏	口径:[13.2], 器高:(4.1), 底径:[6.5]	やや甘い	長石・石英・海綿状骨針	外面:2.5Y6/2 灰黄, 内面:2.5Y7/2 灰黄	内外面:ロクロ水挽き成形	30	覆土
	2	須恵器無台坏	口径:[14.0], 器高:5.1, 底径:[7.8]	良好	長石・石英・海綿状骨針	5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	10	床直～床面
	3	土師器無台坏	口径:[14.0], 器高:(5.8), 底径:4.5	普通	長石・石英	10YR6/4 にぶい黄橙	外面:ロクロ水挽成形, 底面:回転ヘラ起こし, 内面:研磨黒色処理	40	カマド中・床直～床面
	4	土師器坏	口径:[13.4], 器高:(3.6)	普通	長石・石英・赤色粒子	7.5YR7/4 にぶい橙	内面:横ナデ, 外面:口縁部は横方向のナデ, 体部～底部は横方向のヘラミカキ	30	カマド内
	5	土師器無台坏	器高:(2.0), 底径:[8.0]	普通	長石・石英	外面:10YR7/4 にぶい黄橙, 内面:N3/0 暗灰	外面:ロクロ水挽成形, 底面:回転ヘラ起こし→ヘラケズリ, 内面:研磨黒色処理	5	覆土
	6	土師器高台付皿	口径:13.8, 器高:3.0, 高台径:6.1	普通	長石・石英・海綿状骨針	外面:10YR7/4 にぶい黄橙, 内面:N3/0 暗灰	外面:ロクロ水挽成形, 底面:回転ヘラ起こし→高台貼り付け, 内面:研磨黒色処理	80	カマド内
	7	土師器高台付碗	器高:(4.1), 高台径:[8.0]	普通	長石・石英	外面:10YR6/4 にぶい黄橙, 内面:N3/0 暗灰	外面:ロクロ水挽成形, 底面:回転ヘラ起こし→ヘラケズリ→高台部貼り付け, 内面:研磨黒色処理	10	P4 付近床直
	8	土師器高台付碗	器高:(2.4), 高台径:[8.0]	普通	長石・石英・赤色粒子	外面:10YR7/3 にぶい黄橙, 内面:10YR7/4 にぶい黄橙～5Y4/1 灰	外面:ロクロ水挽成形, 底面:回転ヘラ起こし→ヘラケズリ→高台部貼り付け, 内面:ナデ	5	P1 付近床直
	9	土師器高台付皿	器高:(1.7), 高台径:[6.2]	普通	長石・石英	外面:10YR7/3 にぶい黄橙, 内面:N3/0 暗灰	外面:ロクロ水挽成形, 底面:回転ヘラ起こし→ヘラケズリ→高台部貼り付け, 内面:研磨黒色処理	10	床直～床面
	10	土師器甕	口径:[20.0], 器高:(2.6)	普通	長石・石英・雲母	10YR6/4 にぶい黄橙	内外面:横ナデ	2	カマド付近床面直上
	11	土師器甕	口径:[20.0], 器高:(5.9)	普通	長石・石英・雲母	外面:7.5YR6/4 にぶい橙, 内面:7.5YR7/6 橙	内面:横ナデ, 外面:口縁部は横ナデ, 体部は指圧痕	5	カマド内
	12	土師器甕	口径:[16.8], 器高:(7.8)	普通	長石・石英・雲母	外面:7.5YR4/3 褐, 内面:5YR4/4 にぶい赤褐	内面:横ナデ, 外面:口縁部は横ナデ, 体部は指圧痕	5	カマド内
	13	土師器甕	器高:(2.2), 底径:[7.8]	普通	長石・石英	7.5YR6/4 にぶい橙	外面:斜方向のヘラケズリ, 内面:横ナデ	2	覆土
	14	土師器甕	器高:(4.1), 底径:[6.2]	普通	長石・石英・雲母	10YR4/3 にぶい黄褐, 内面:10YR7/4 にぶい黄橙	外面:斜方向のヘラケズリ, 内面:横ナデ	2	床直～床面
	15	須恵器甕	口径:[27.0], 器高:(12.0)	良好	長石・石英・海綿状骨針	5Y4/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	カマド内

(3) 第5号住居跡

【検出位置】 古墳時代の第3号竪穴建物跡の南西1.35mの位置で検出された(第4図・第17図)。

【主軸方位】 N-15°-E。

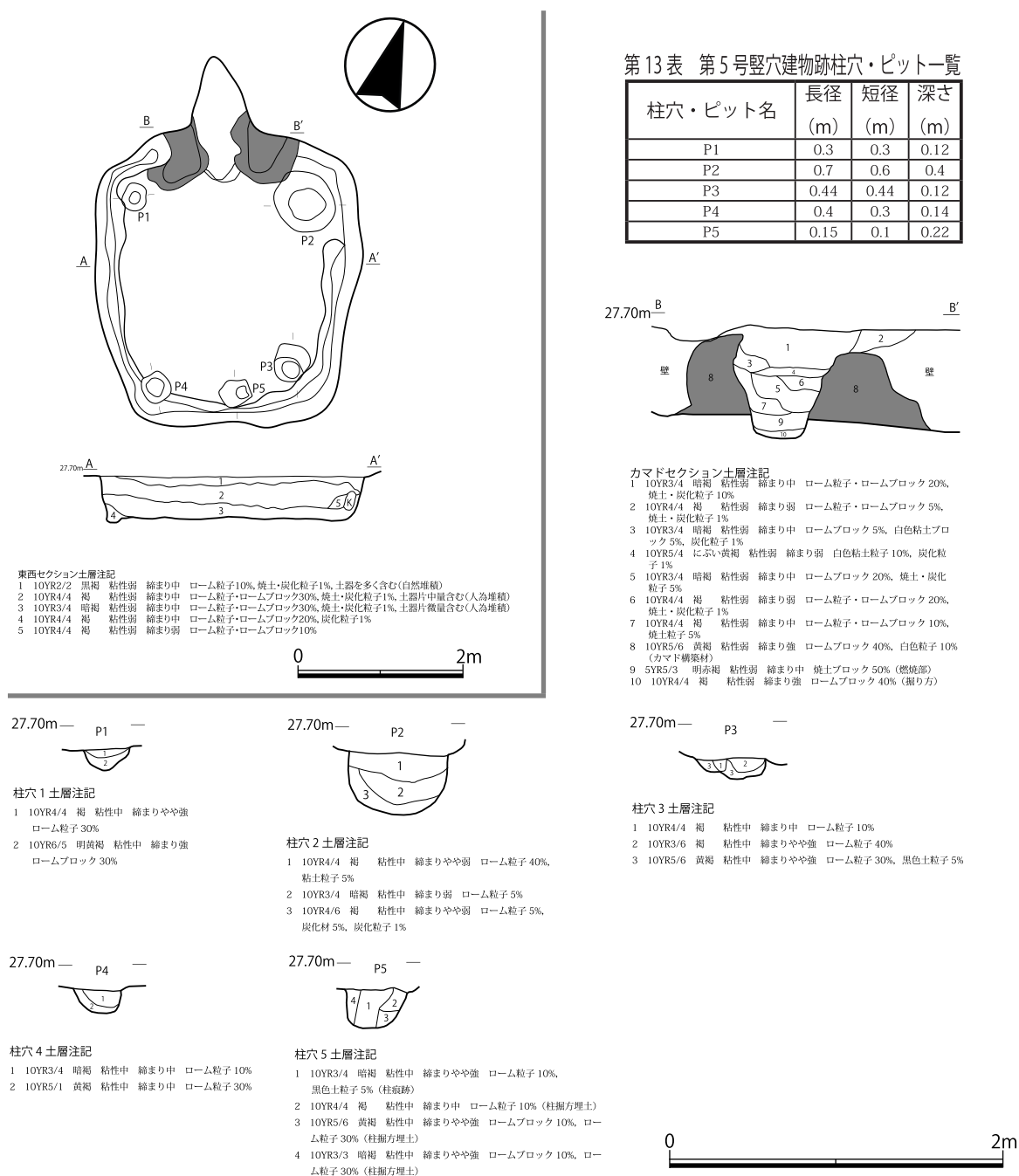
【規模】 東西3.3m, 南北4.5m。

【壁・周溝】 遺構確認面から床面までの壁の深さは0.50~0.56mで, 周溝はP2の南側まで掘削が止まっているため, 全周はしていない。

【柱穴・ピット】 柱穴は隅に4基確認されており, 南側では出入り口ピットが確認されている(第13表)。

【カマド】 北側で確認されている。

【覆土】 覆土は5層から構成され, 最上層である1層のみが自然堆積による埋没と考えられ, 2層以下は全て人為堆積による。遺物は2層を中心に出土している。



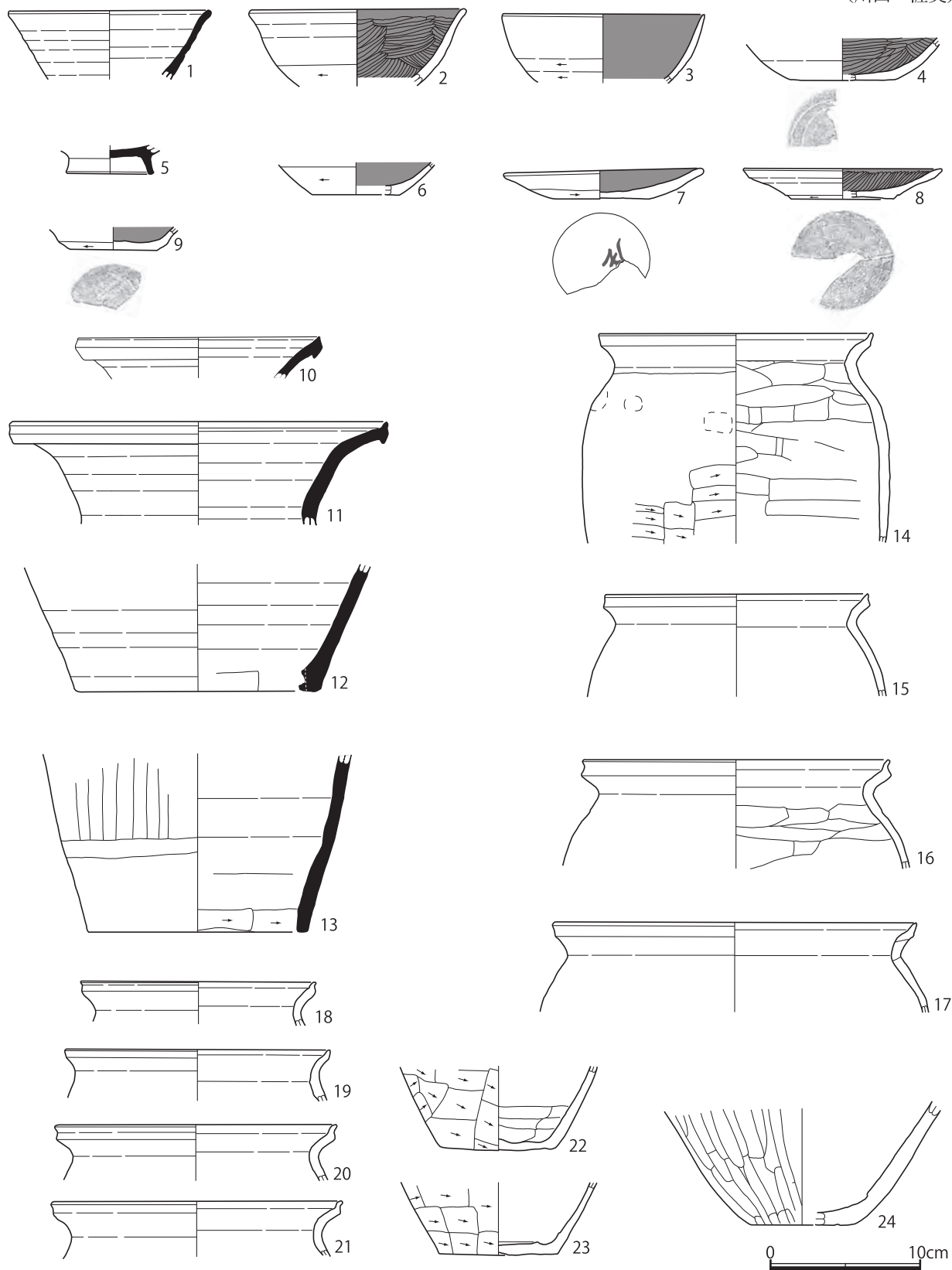
第17図 第5号竪穴建物跡



【遺物】 土師器，須恵器が出土している。ここでは図化に耐えられる 24 点を提示する（第 18 図・第 14 表）。

【時期】 1 の須恵器無台坏および 5 の須恵器有台坏，2～4・6～9 の内面黒色処理土師器碗・皿・無台坏の技術的・形態的特徴が 9 世紀後葉頃のものであることから，9 世紀第 III 四半期以降に廃絶したと考えられる。

（川口・渥美）



第 18 図 第 5 号竖穴建物跡出土遺物

第 14 表 第 5 号竪穴建物跡出土遺物観察表

挿図	No.	種別	法量 (cm)	焼成	胎土	色調	成形・整形	残存率 (%)	出土 位置
第 18 図	1	須恵器無 台坏	口径:[14.0], 器高:(4.7)	やや甘 い	長石・石英・海綿状骨針	2.5Y7/3 浅黄	内外面:ロクロ水挽き成形	10	出入りロケット 付近覆土
	2	土師器碗	口径:[14.8], 器高:(5.3)	普通	長石・石英	外面:10YR6/3 にぶい黄橙~ 10YR3/1 黒褐, 内面:N3/0 暗灰~10YR6/4 にぶい黄橙	外面:体部は横方向のロクロ水挽き成形, 内面:研磨黒色処理	5	3 層
	3	土師器碗	口径:[13.8], 器高:(4.7)、 底径:[7.2], 器高:(2.9)	普通	長石・石英・海綿状骨針	外面:5YR6/6 橙, 内面: N3/0 暗灰	外面:体部は横方向のロクロ水挽き成形, 内面:研磨黒色処理	5	覆土
	4	土師器碗	口径:[13.7], 底径:[6.6], 器高:(2.1)	普通	長石・石英・海綿状骨針・赤 色粒子	7.5YR6/6 橙	外面:体部は横方向のヘラケズリ, 内面: 研磨黒色処理	60	覆土上層
	5	須恵器有 台坏	口径:[13.6], 底径:[7.0], 器高:(2.1)	普通	長石・石英	10YR6/3 にぶい黄橙	外面:体部は横方向のロクロ水挽き成形, 内面:研磨黒色処理	30	確認面
	6	土師器碗	口径:[13.6], 底径:[7.0], 器高:(2.1)	普通	長石・石英	10YR6/3 にぶい黄橙	外面:体部は横方向のロクロ水挽き成形, 内面:研磨黒色処理	30	確認面
	7	土師器皿	口径:[13.7], 底径:[6.6], 器高:(2.1)	普通	長石・石英・海綿状骨針・赤 色粒子	7.5YR6/6 橙	外面:体部は横方向のヘラケズリ, 内面: 研磨黒色処理	60	覆土上層
	8	土師器皿	口径:[13.6], 底径:[7.0], 器高:(2.1)	普通	長石・石英	10YR6/3 にぶい黄橙	外面:体部は横方向のロクロ水挽き成形, 内面:研磨黒色処理	30	確認面
	9	土師器無 台坏	口径:[13.6], 底径:[7.0], 器高:(2.1)	普通	長石・石英	10YR6/3 にぶい黄橙	外面:体部は横方向のロクロ水挽き成形, 内面:研磨黒色処理	30	確認面
	10	土師器無 台坏	口径:[13.6], 底径:[7.0], 器高:(2.1)	普通	長石・石英	10YR6/3 にぶい黄橙	外面:体部は横方向のロクロ水挽き成形, 内面:研磨黒色処理	30	確認面
	11	須恵器甕	口径:[17.0], 器高:(2.3)	良好	長石・石英・海綿状骨針	外面:5Y4/1 灰, 内面: 5Y6/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形, 縁部は貼り 付け	5	覆土
	12	須恵器甕	口径:[17.0], 器高:(2.3)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	13	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	14	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	15	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	16	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	17	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	18	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	19	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	20	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	21	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	22	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	23	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層
	24	須恵器甕	口径:[26.0], 器高:(7.0) 底径:[17.0], 器高:(8.7)	良好	長石・石英・海綿状骨針	7.5Y5/1 灰	内外面:ロクロ水挽き成形	5	覆土最上層

### 3-5 近世

当該期の遺構は、掘立柱建物跡が1棟確認されている。遺物は銭貨が調査区8の周辺で表面採集されている。

#### (1) 第1号掘立柱建物跡

【検出位置】 確認調査の際に設定した調査区6のトレンチ1において検出された(第2・19図)。

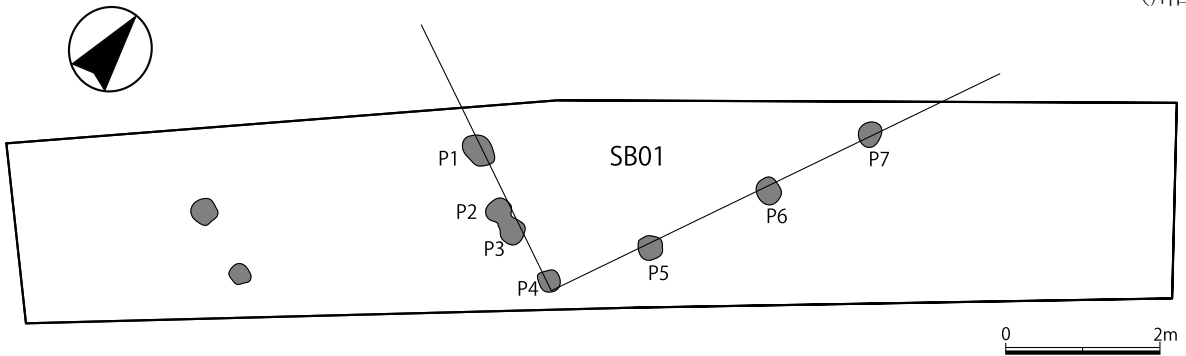
【主軸方位】 N-22°-E

【規模】 トレンチで部分的に確認されているため、桁行、梁行ともに不明であるが、南北5.7m以上、東西2.7m以上である。

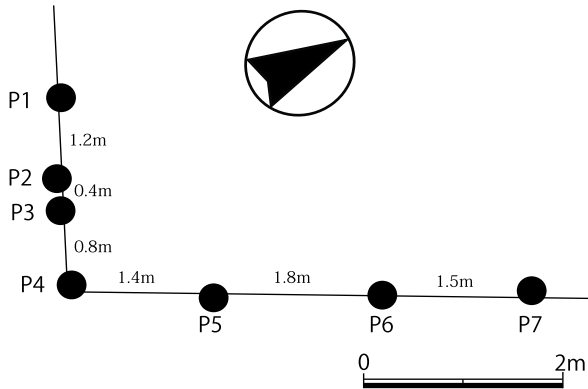
【柱穴】 7基、確認されている。P1とP4～P7は独立しているが、P2とP3は一部重複している。長軸・短軸の規模は、第15表のとおりである。柱穴は一定の間隔に並ばない不等間である(第20図)。

【遺物】 なし。

(川口)



第19図 第1号掘立柱建物跡



第20図 第1号掘立柱建物跡柱芯々間距離模式図

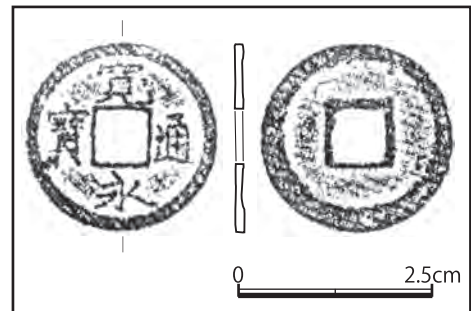
第15表 第1号掘立柱建物跡柱穴一覧

柱穴名	長径 (cm)	短径 (cm)
P1	45	35
P2	35	30
P3	35	35
P4	30	28
P5	35	30
P6	35	30
P7	32	30

#### (2) 銭貨

第21図は確認調査区8のトレンチ4周辺で表面採集された寛永通宝である。書体等から新寛永と考えられる。初鑄年は1697(元禄10)年である。

(川口)



第21図 寛永通宝

## 第4章 総括

この度の調査により、先土器時代～近世に至るまでの遺構・遺物が多数検出され、元石川大谷原遺跡における土地利用の変遷が明らかとなった。先土器時代・縄文時代については、遺構は確認されていないが、遺物集中地点に伴わない剥片や遺構に伴わない縄文土器が多数検出された。

弥生時代の遺構・遺物は確認されていないが、古墳時代後期に至って集落の形成が始まる。

古墳時代の竪穴建物から出土している土器は、その技術的・形態的特徴から TK209 並行の 6 世紀末葉唐 7 世紀初頭頃の所産とみられる。時期はやや先行するが、谷津を隔てた西側に展開する小仲根遺跡 SI02（平成 14 年度調査）と遺物組成が酷似している。

これらの古墳時代の竪穴建物は本遺跡の東側に展開する森戸古墳群との有機的な繋がりが推察される。森戸古墳群は、石川川右岸の標高 27.2m～30.5m の台地上に展開する古墳群で、東西 250m、南北 850m の範囲に前方後円墳 1、円墳 17、方墳 1 が密集して築造されている。当古墳群中からは底部穿孔壺や滑石製の勾玉が報告されていることから（郡司 1973・伊東 1976）、前・中期から形成されている古墳群の可能性が高い。

ただし、本古墳群中には形象埴輪や円筒埴輪を伴う前方後円墳や円墳もあり（吉川 1991・川口 2008）、明治 9 年に刊行された栗田寛による『葬礼私考』には、礫床を持つ横穴式石室を主体部とする円墳から大刀 1 振、管玉 2、銅環 2 が出土していることが記載されている（佐藤 1990）。また、同書には本古墳群から礫床を持つ刳り抜き式の石棺が出土したことも記されており、管玉数個とともに銅環が 1 点出土したようである（佐藤前掲）。

これらの資料および古墳の密集度から、本古墳群は主として後期以降に造墓活動が展開していった群集墳と推察される（第 22 図）。このような隣接古墳群との地理的關係・時期的並行關係から本遺跡と小仲根遺跡は、森戸古墳群の造墓集団の集落と理解することも出来るだろう。

奈良時代の遺構・遺物は確認されておらず、平安時代の前半になってから集落の形成が再び始まる。この土地利用の在り方は、隣接する小仲根遺跡の土地利用と共通しており（川口・小川・大淵 2002）、同一遺跡として理解すべきなのかもしれない。

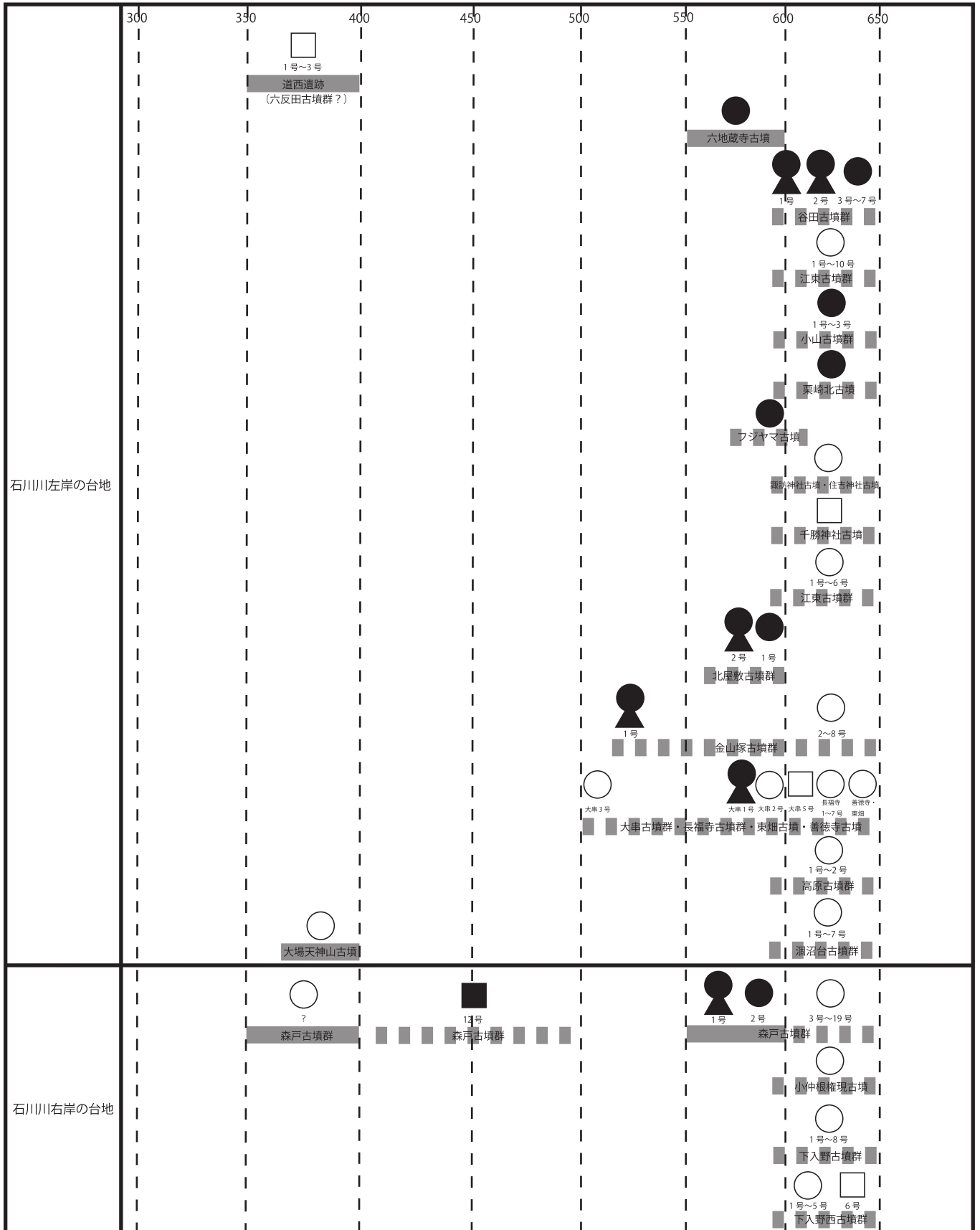
平安時代の竪穴建物 3 棟のうち第 1 号竪穴建物からは、見込みに「山」、底裏に「山岡」と墨書された須恵器有台坏や体部外面に「其山カ」と墨書された須恵器無台坏、底面に「仲寺カ」と墨書された土師器無台坏が出土しており、第 5 号竪穴建物からは底面に「全」と墨書された内面黒色処理土師器が出土した。

これらの文字資料から、平安時代の集落は 9 世紀後半以降に廃絶したとみられる。また、第 1 号竪穴建物からは注目すべき遺物として鉄製の鋤・刀子・錠？とともに鉄製鉸具が 1 点出土しており、市内では百合が丘町に所在した道西遺跡第 5 号竪穴住居（日置・石丸・新垣・渥美・川口・色川 2008）に次ぐ出土例である。

鉄製鉸具の性格について検討された片平雅俊氏によれば、本資料は古墳時代の馬具にみられる鉄製鉸具との共通点が多いことから、律令官人の腰帯具に伴う銜帯ではなく、牛馬に使用された馬具の革帯に伴う鉸具とのことである（付章参照）。平安時代集落における牛馬飼育、牛馬耕作を示唆する貴重な資料と言えよう。

中世の遺構・遺物は確認されていないが、近世以降のものとみられる掘立柱建物 1 棟と寛永通宝が検出されている。この掘立柱建物がどのような性格の建物であるのかは不明であるが、遅くとも江戸時代後半になってから土地利用が再開されていることが、今般の調査で明らかとなった。

（川口）



第 22 図 石川川流域における古墳群の変遷

※白抜きの古墳は時期不確定

## 参考・引用文献

- 石川要行・小林正義 1977 「10 水戸・濁沼周辺」『地学のガイドシリーズ3 茨城県地学のガイド 茨城県の地質とその  
おいたち』コロナ社
- 伊東重敏 1976 『大六天古墳（森戸古墳群第12号墳）』（常澄村文化財調査報告第1集）常澄村教育委員会
- 井上義安・蓼沼香未由 1999 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会  
・仁平妙子・根本睦子
- 茨城県教育委員会 2000 『茨城県遺跡地図』
- 川口武彦 2008 「水戸市域北・中部における古墳の群構成」『明治大学古代学研究所シンポジウム「常陸の古墳群」  
当日配布資料』明治大学古代学研究所
- 川口武彦・小川和博・ 2002 『水戸市元石川町所在小仲根遺跡発掘調査報告書』水戸市教育委員会  
大淵淳志
- 郡司良一 1973 「常澄村森戸発見の底部穿孔土器」『茨城考古学』第5号 茨城考古学会
- 佐藤次男 1990 「第2章 古墳と豪族と民衆」『常澄村史 通史編』常澄村
- 鈴木素行 1998 「弥生時代の遺構と遺物」『武田石高遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』ひたちなか市教育委員会・  
財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 2002 「仙湖の辺一『武田式』以前の『十王台式』について一」『茨城県史研究』86 茨城県立歴史館
- 2005 「君ヶ台貝塚の土錘と石錘」『ひたちなか埋文だより』22 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 2007 「向野E遺跡における縄文時代中期後葉の集落跡について一君ヶ台貝塚の再検討を添えて一」『向  
野遺跡群』（財）ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 日置剛史・石丸敦志・ 2008 『薄内遺跡（第1地点）一移動体通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸  
新垣清貴・渥美賢吾・  
市教育委員会
- 川口武彦・色川順子
- 吉川明宏 1991 「常澄村森戸出土の人物埴輪片」『年報』10 財団法人茨城県教育財団

## 付章 第1号竪穴建物跡出土鉄製鉸具について

片平雅俊  
(日立市郷土博物館)

### 1. 資料の観察

本資料は完存している。鍵穴状の形態（楕円部から直線部への移行は緩やか）の輪金と、逆T字形の刺鉄、輪金下端を接続する棒状部とからなる鉸具で、全長約80mm、輪金最大幅約60mm、輪金基部幅約50mmである。

輪金と刺金が接する部分を中心に、錆瘤とは別の、革帯が錆着したと考えられる茶褐色～赤褐色を呈する付着物が、全面に認められる。このことから、本鉸具は単体で存在したものではなく、革帯とともに住居に遺棄もしくは住居跡に投棄されたものと考えられよう。錆による膨らみがあるのかもしれないが、全体的にガッシリとした印象を受ける。

### 2. 用途の推定

鉸具には2つの用途がある。ひとつは、律令官人が使ったもので、もう一つは馬を含めた動物に使うものである。鉸具を『広辞苑』（第六版）で引くと、次のような説明がある。

かこ【鉸具】1 革帯などをかけとめるための鉤。革帯の一端につけ、他の一端をこれに通し入れ、その孔に刺鉄を差し込んで留めるもの。2 馬具の鐙の頂部にある金具。力革に接続するのに用いる。かく。

鉸具の第一義的な意味は、革帯を留める鉤であり、「鉸具＝馬具」ではない。筆者がこれまで集成した茨城県域の古墳時代、奈良・平安時代の馬具では、鉸具が単体で出土した例は対象から除外した。馬装に伴う鉸具の可能性は高いものの、人もしくはウマ以外の家畜（ウシを想定するが、常陸地方のウシの初現がいつなのかは不明）に装着された可能性も捨てきれないためである。このような鉸具をとりまく状況をふまえつつ、本資料の用途の推定を試みる。

この鉸具は、輪金下端を横に渡る棒状部分に革帯を巻きつけて、取り付けられていたもので、棒状部の輪金内側の幅は25mm前後である。これにより本鉸具が取り付けられた革帯の幅は、25mmより若干狭いことになる。この革帯が用いられていたのは、人かそれとも動物か。

#### (1) ウマに用いられた革帯（繫）の幅の推定

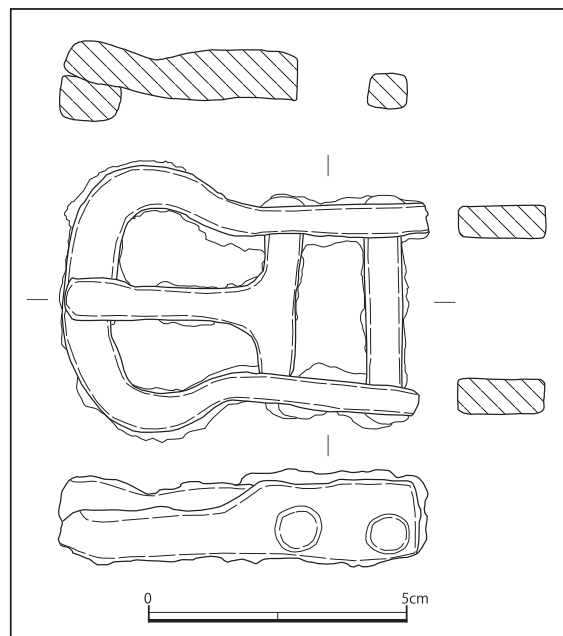
古墳時代の馬具の中で、革帯の幅が確認できる資料を以下に示す。

【西大塚1号墳】（日立市南高野町 6世紀第Ⅰ四半世紀） 鉸具に遺存する革帯の外縁から推定される幅は25mm、厚さ10mm程度。環状雲珠に遺存する革帯幅は15mm、厚さ3mm。鉄製楕円形鏡板立間に連結する兵庫鎖に遺存する革帯幅は約20mm。このほか、組合せ十字形辻金具に伴う貴金具、有脚半球形辻金具に伴い貴金具、剣菱形杏葉吊金具などから推定される革帯幅は20～25mmである。

【赤羽B-1号墓】（日立市久慈町 6世紀第Ⅲ四半世紀） 杏葉立間から推定される革帯幅は22～29mm、雲珠脚部幅23mm前後、コハゼ形繫飾金具幅27mm。革帯の幅は22～27mm前後となろうか。

【風返稻荷山古墳】（かすみがうら市風返 7世紀第Ⅰ四半世紀） 棘付花卉形杏葉吊金具、有脚半球形雲珠脚部の幅は30～40mmであり、革帯幅も同様であろう。

上記のように、茨城県域の古墳時代の馬具に伴う革帯（繫）の幅は20～30mmであり、本鉸具の輪金下端の棒状部の輪金内側の幅25mmは、馬装に伴う革帯の幅としては不自然でない。



元石川大谷原遺跡SI01出土鉄製鉸具

## (2) 同様の形態をとる馬装に用いられた鉸具の例

本鉸具と同様の形態をとる馬装に伴って出土した例としては、下記の類例があり、いずれも、本鉸具と同程度の大きさである。

中台2号墳（つくば市北条 6世紀後半）

中台21号墳（つくば市北条 6世紀第IV四半世紀～7世紀第I四半世紀）

二本松古墳（東海村大字石神外宿 7世紀第I～II四半世紀）

宮中野大塚古墳（鹿嶋市宮中 7世紀第II四半世紀）

6世紀前半代の鉸具は、輪金を一体で形成し、そこに刺鉄をからめて取り付けの手法の例が多い。この手法の鉸具が6世紀後半以降に存在しないわけではない。輪金は基部を除いて形成、逆T字形の刺鉄や、基部の棒状を取り付ける鉸具が6世紀後半代に出現するというのは、より複雑な構造であり、新出的な様相として、鉸具の形態変遷を捉えることが可能なのかもしれない。

## (3) 人が装着した鉸具—腰帯具

山中敏史編『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺跡編』（2004年 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）所収の小林謙一「IV—1 腰帯具・銭貨・印章」には、「鉸具・蛇尾は、馬具の革製の帯等にも見られるものである。したがって、鉸具や蛇尾だけでは、銜帯、馬装のいずれに伴うのか、区別できない」と記される。また正倉院には樂装束用の銜帯20条近くが伝来しており、「巡方・丸柄横幅—蛇尾基部幅—鉸具板金具幅—帯幅」であるという。銜帯に伴う巡方・丸柄、鉸具・蛇尾はいずれも銅製である。これらのことから、人一官人が装着した鉸具、銜帯に伴う鉸具は、石岡市鹿の子C遺跡42号住居跡出土（輪金のみ出土）のように、銅製鉸具であると考えられる。

以上みてきたように、本鉸具は鉄製であることから、少なくとも官人の銜帯に伴う鉸具とは考え難いことになる。また、古墳時代後期の馬装に伴う鉸具と同様の形態をとる鉸具が存在することなどからみて、ウマなどの動物に装着する鉸具である蓋然性は高いことになろう。「馬具」と言い切っても良いのかもしれないが、ウシの可能性は捨て切れない。

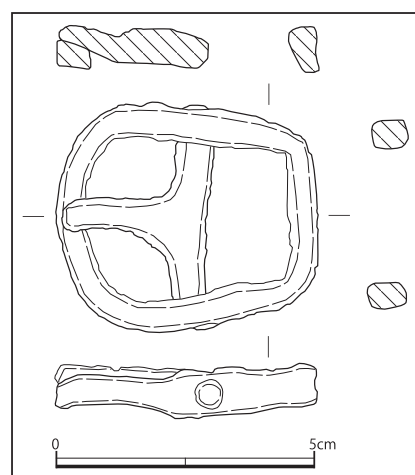
## 3. おわりに

本稿では、元石川大谷原遺跡第1号竪穴建物跡から出土した鉄製鉸具が、牛馬等に使用された鉸具であると位置づけた。水戸市域では、道西遺跡第5号住居跡からも形態は異なるが、鉄製の鉸具が出土しており、第5号住居跡の年代が9世紀後葉に位置づけられることから、元石川大谷原遺跡第1号竪穴建物跡の鉄製鉸具と同時期の所産と言える。

今回取り扱った資料は集落出土例であるが、このような集落（住居跡）出土金属製品を集成している市町村は、どれだけ存在するのでしょうか。筆者が所属する日立市では、埋蔵文化財保護（何点の鉄製品が現在出土しており、そのうち保存処理を要するものが何点、などのデータとして）・考古学的観点から、集成の必要性は痛感しながらもまだ着手できていない。

この集落出土金属製品データベースが完成すれば、多分、古墳時代以降古代に至る金属製品の研究には、大きな進展がみられるものと考えられる。農工具等の金属製品の変遷を出土住居跡の年代から追うことが可能になるのである。

古墳時代以降に住居跡から出土して馬具類は間違いなく存在する。古代については、古墳時代の影響が濃い馬具から、次第にその影響が薄れていくことが確認されている。鉸具についても、間違いなく形態の変遷は認められる。この変遷の年代確認についても、データベースが大いに役立つはずである。一市町村にとどまらず、広域で集落出土金属製品のデータベース作成が急務といえよう。

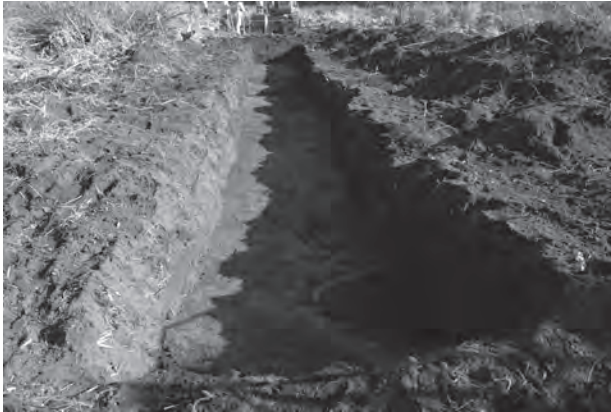


道西遺跡S105出土鉄製鉸具(参考資料)



# 写真図版

# 図版 1



試掘調査区② T2 遺構検出状況 (南東から)



試掘調査区② T2 溝構検出状況 (南西から)



試掘調査区③ T1 道路側溝検出状況 (南西から)



試掘調査区③ T2 道路側溝検出状況 (北東から)



試掘調査区③ T4 道路状遺構検出状況 (南から)



試掘調査区③ T4 道路状遺構土層断面 (東から)



試掘調査区④ T1SI01 土層断面 (北東から)



試掘調査区⑥ T1 掘立柱建物検出状況 (南西から)



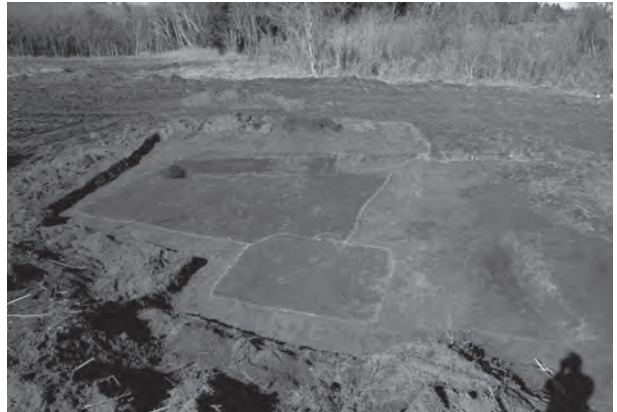
本発掘調査 SI01 遺物出土状況 (北西から)



本発掘調査 SI01 遺物出土状況近景 (西から)



本発掘調査 SI01 完掘状況 (西から)



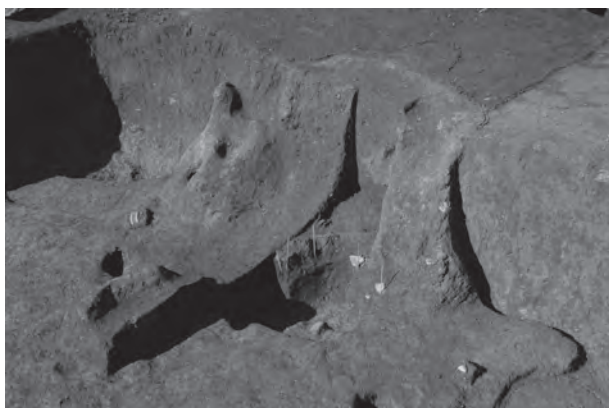
本発掘調査 SI02・SI04 検出状況 (東から)



本発掘調査 SI02 カマド近景 (南から)



本発掘調査 SI02 完掘状況 (南から)

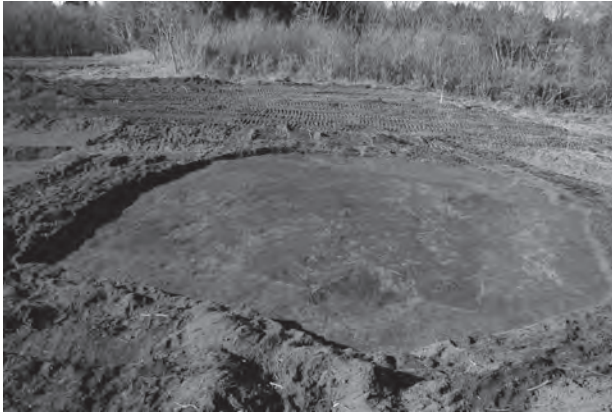


本発掘調査 SI04 カマド近景 (南から)



本発掘調査 SI04 完掘状況 (南から)

図版 3



本発掘調査 SI03 検出状況 (南から)



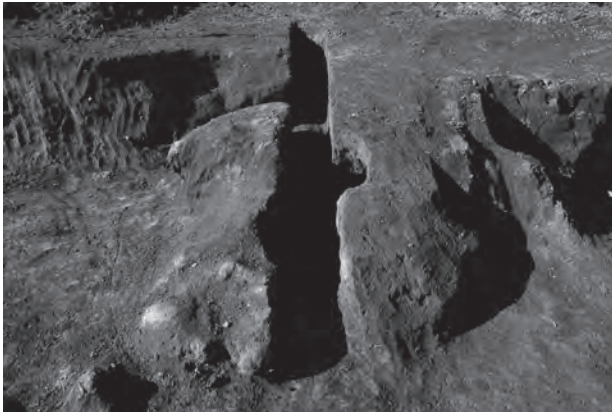
本発掘調査 SI03 掘削状況 (南東から)



本発掘調査 SI03 カマド付近遺物出土状況 (南東から)



本発掘調査 SI03 炭化材出土状況 (南東から)



本発掘調査 SI03 カマド近景 (南から)



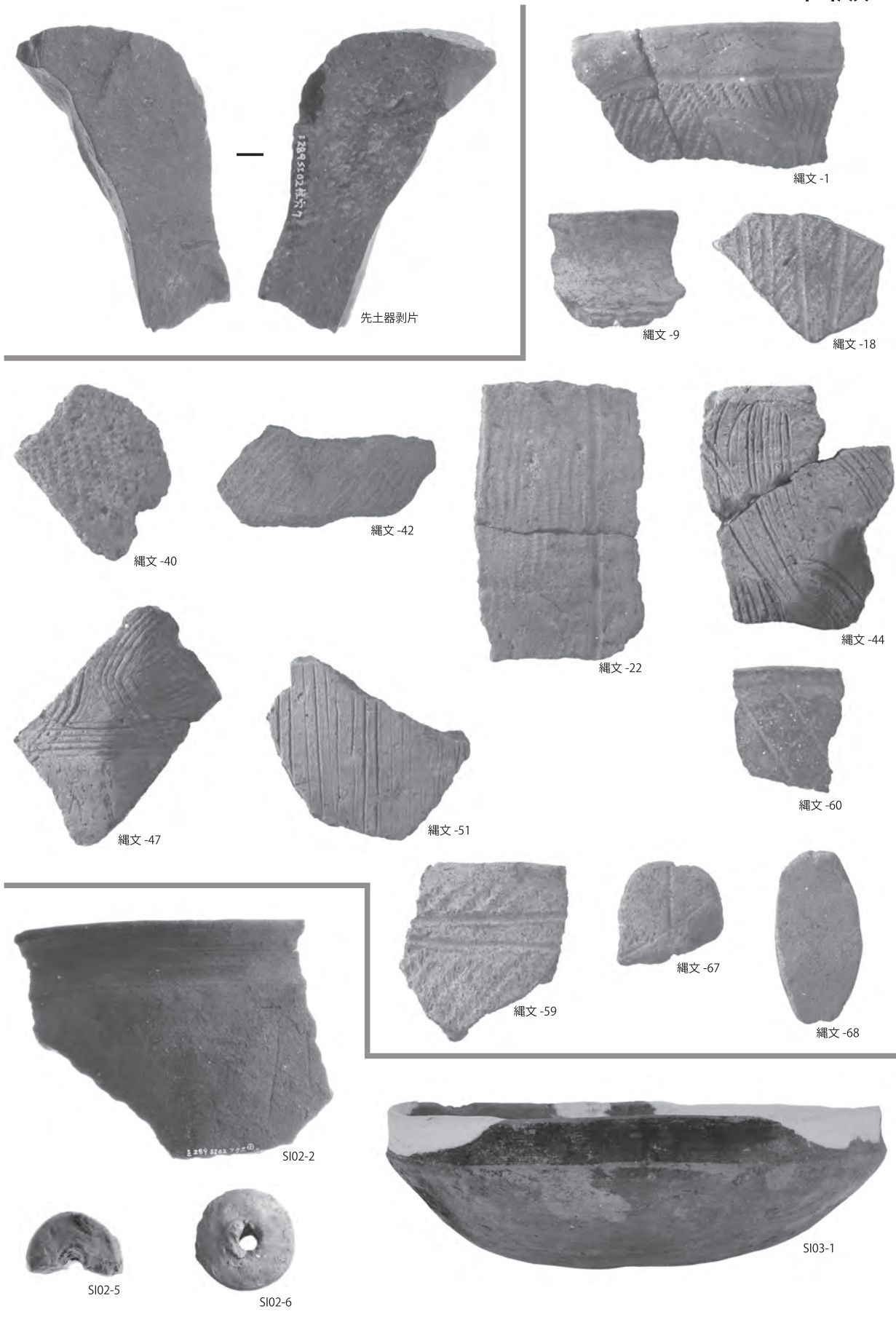
本発掘調査 SI03 炭化材近景 (南から)



本発掘調査 SI05 東西セクション (南から)

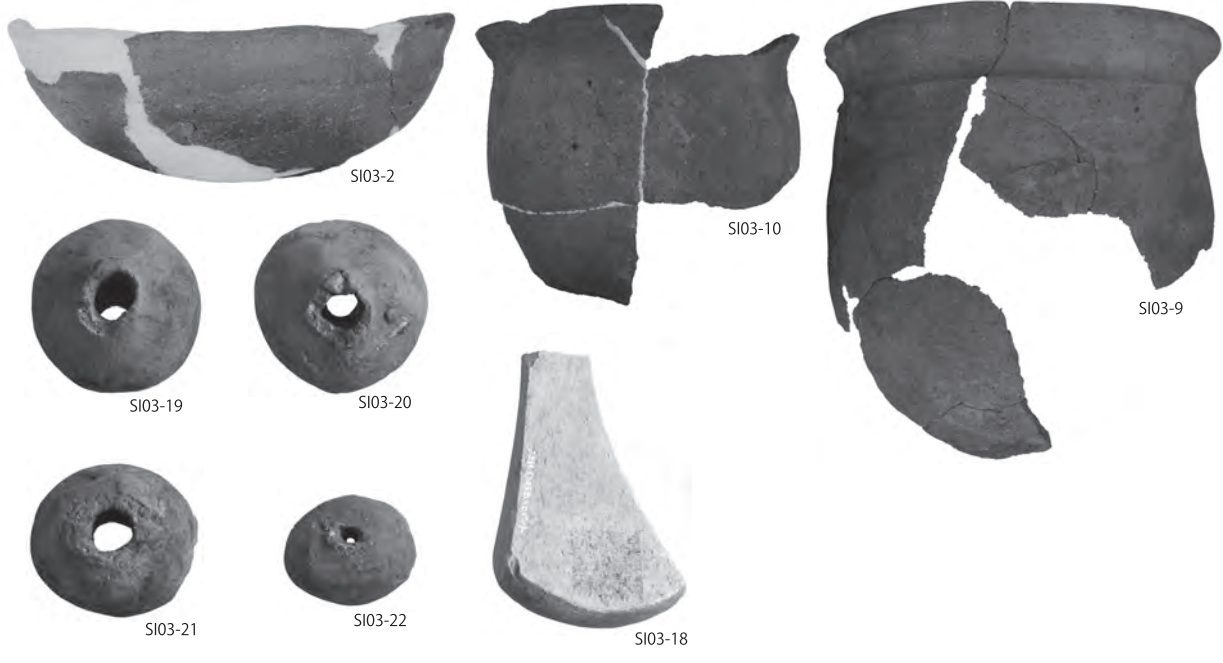


本発掘調査 SI05 完掘状況 (南から)



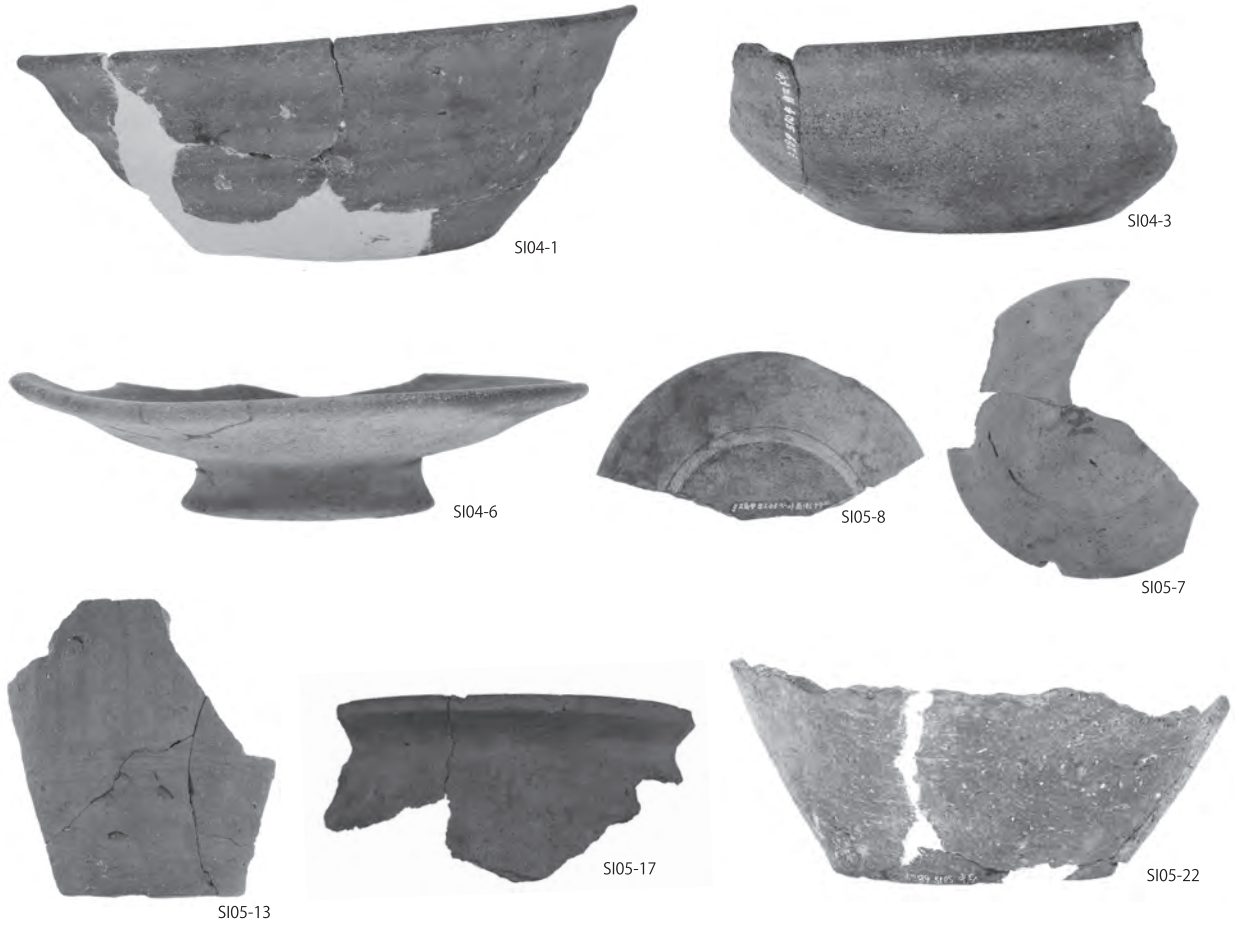
出土遺物 (1)

图版 5

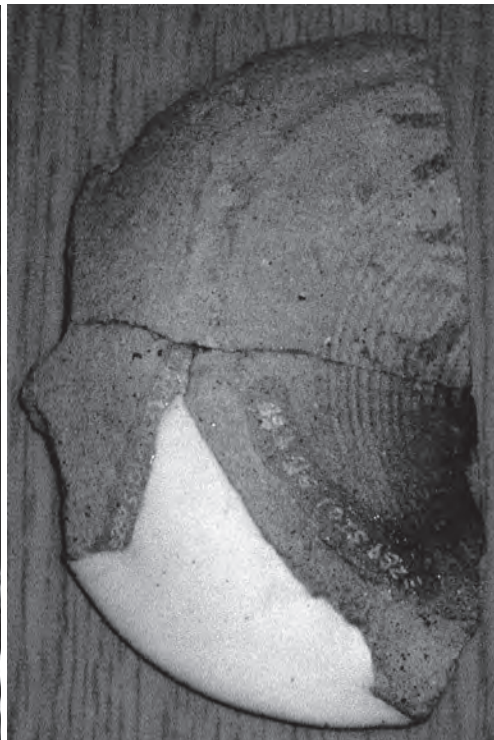


出土遺物 (2)

図版 6



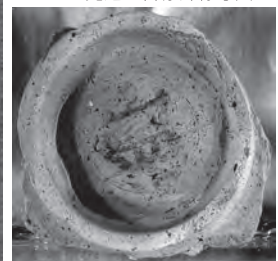
SI01-3 体部墨書赤外線写真



SI01-13 底面墨書赤外線写真



SI01-7 見込墨書赤外線写真



SI01-7 底裏墨書赤外線写真



寛永通宝

出土遺物 (3)

# 報告書抄録

ふりがな	もといしかわおおやはらいせき								
書名	元石川大谷原遺跡								
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第 20 集								
編著者名	川口武彦・色川順子・瀧美賢吾・片平雅俊								
編集機関	水戸市大谷原遺跡発掘調査会	所在地	〒 310-8610 茨城県水戸市中央 1-4-1 ☎ 029-224-1111 (代)						
発行機関	水戸市教育委員会	所在地	〒 310-8610 茨城県水戸市中央 1-4-1 ☎ 029-224-1111 (代)						
発行年月日	2008 (平成 20) 年 12 月 24 日								
しよしゆういせきめい 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡 番号	。 , ”	。 , ”				
もといしかわおおやはらいせき 元石川大谷原 遺跡	みとしもとしかわちようあざ 水戸市元石川町字 おおやはらいせき 大谷原 2265 番地 外	08201	289	36° 19’ 06”	140° 30’ 11”	確認調査 10/24/07 ～ 11/5/07	920.0 m <sup>2</sup>	宅地造成工事	
						本発掘調査 1/21/08 ～ 2/14/08			365.8 m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
もといしかわおおやはらいせき 元石川大谷原 遺跡	集落跡	先土器			剥片		古墳時代後期の竪穴建物 2 棟のうち SI02 は 8 本の柱穴を持ち、四隅の主柱穴が深く、主柱穴の間の柱穴が浅い構造の特異なものであった。SI03 は、炭化材が壁際から竪穴の中心に向かって放射状に倒壊した状況で検出され、焼失したとみられる。遺物は 6 世紀末葉～7 世紀前葉頃の土師器坏や甕、球状土錘、砥石などが出土しており、谷津を隔てた西側に展開する小仲根遺跡 SI02 (平成 14 年度調査) と遺物組成が酷似している。遺物は完形のもものが少なく、廃棄された状態で出土していることから、廃絶に伴う人為的放火の可能性はある。		
		縄文			縄文土器, 土器片錘				
		古墳	竪穴建物 2			土師器, 球状土錘, 砥石			
		奈良・平安	竪穴建物 3			土師器, 須恵器, 墨書土器, 灰釉陶器, 鉄製品 (鉸具・刀子・鉏・鋳?)			
		中・近世	掘立柱建物 1, 道路状遺構 1, 溝 3			銭貨 (寛永通宝)		平安時代の竪穴建物 3 棟のうち SI01 からは、見込みに「山」、底裏に「山岡」と墨書された須恵器有台坏や底面に「仲寺カ」と墨書された内面黒色処理土師器坏が、SI05 からは外面に「全」と墨書された内面黒色処理土師器が出土した。これらの資料から、平安時代の集落の年代は、9 世紀中葉を中心とした年代とみられる。	



# 水戸市埋蔵文化財調査報告

第1集	台渡里廃寺跡—範囲確認調査報告書—	2005年3月発行
第2集	台渡里廃寺跡—市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—	2005年4月発行
第3集	大鋸町遺跡—グランディヒルズ元吉田造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2005年8月発行
第4集	台渡里廃寺跡—市道常磐17号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—	2006年3月発行
第5集	台渡里遺跡—集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2005年3月発行
第6集	吉田古墳Ⅰ—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第3次調査報告書—	2006年3月発行
第7集	大鋸町遺跡跡(第3地点) —市道浜田207号線側溝新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2006年3月発行
第8集	坏遺跡(第3地点)—ヴィヴァンコート赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第9集	坏遺跡(第4地点)—プランタンコロニーⅡ建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第10集	吉田古墳Ⅱ—史跡整備計画に伴う吉田古墳群第1号墳の第3次発掘調査報告書—	2007年3月発行
第11集	平成17年度水戸市内遺跡発掘調査報告書	2007年3月発行
第12集	アラヤ遺跡(第2地点) —市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第13集	米沢町遺跡(第5地点)—住宅展示場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2007年3月発行
第14集	大串遺跡(第7地点)—介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第15集	台渡里遺跡(第39次)—公共下水道管埋設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年3月発行
第16集	渡里町遺跡(第5地点) —市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年6月発行
第17集	渡里町遺跡(第6地点) —市道常磐34,275号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年6月発行
第18集	薄内遺跡—携帯電話通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年8月発行
第19集	堀遺跡(第9地点)—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年9月発行
第20集	元石川大谷原遺跡—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—	2008年12月発行

水戸市埋蔵文化財調査報告第20集

## 元石川大谷原遺跡

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

印刷 平成20年12月24日

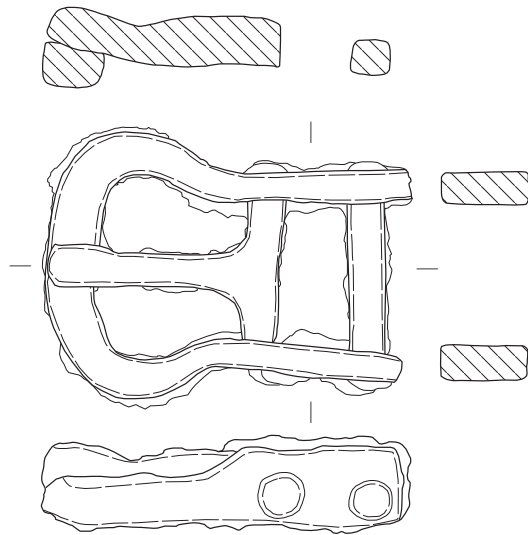
発行 平成20年12月24日

編集 水戸市大谷原遺跡発掘調査会

発行 水戸市教育委員会

印刷 株式会社あけぼの印刷社

水戸市白梅1-2-11



SI01 出土  
鉄製鉸具